

明久のワートリ生活

ただの名のないジャンプファン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妄想全開です。

ただ好きなキャラを自分で動かしてみたいな。そう思っ作りました。

目次

C級隊員

第七話	131
第六話	118
第五話	95
第四話	68
第三話	49
第二話	23
第一話	1

C級隊員

第一話

（said 三門市）

ここは日本唯一戦場となっている街三門市。

三年前この町は突如異世界からの侵略者近界民ネイバーと呼ばれる異世界人に攻撃された。

それが後に第一次大規模侵攻と呼ばれる事件である。

ネイバーには地球上に存在する武器は一切効果がなく日本人はネイバーの攻撃に耐えられず、蹂躪されるかと思つた時彼らが現れた。

「こいつらの事は任せてほしい我々はこの日の為にずっと備えてきた。我々はボーダーだ」

ボーダーと名乗つた彼らのおかげで第一次大規模侵攻は多大な犠牲が出たが終息した。

その後ボーダーは三門市に基地を構えて、現在もたびたび来るネイバーの攻撃から市民を守り続けている。

三門市に以前と変わらず人が過ごせているのはボーダーのおかげだ。

最初は去っていく人もいたが、ボーダーの信頼とともに街の人口は増え続け、現在では以前とおなじぐらい人が住んでいる。

その為、戦場と言っても他の街と比べても特に変わりはないような暮らしぶりである。

ただそれで問題はなくなつたのか？そう聞かれるとそうでも無い。何故ならネイバー達から脅かされた恐怖が薄らぎ人々の心に余裕が生まれ

薄暗くなつた夜この時人氣の少ない裏路地で喧嘩が起きているのもネイバーの攻撃が全く市民の被害になつておらず彼らから命の危険に余裕が出てきたからであらう。

「くそがバカのくせに調子に乗ってんじゃねえよ！」

複数いる中、二人が一人の男の子を押さえつけて寄つてたかつて暴行を加えている。

「この調子にのつてんじゃねえよこの落ちこぼれの問題児が！」

一人の拳が男の子の顔面目掛けて振り下ろされる。

「!？」

抑えられては、躲すことも防ぐこともできない。

勢いそのまま振り下ろされた拳はえぐい音と共に彼の顔面を殴りつけた。

「へ、これで少しはわかったかよ」

そう吐き捨てるように押さえつけられている彼に向かって言う。

抑えられている彼は余程この人たちの怒りを買ったのか、全員すつきりした顔で見下していた。

「何をだよ」

だがそんな顔は彼の大胆不敵にも思える態度と笑みで一瞬で消え去った。

「ああー！」

「何だい今のへなちよこパンチは？こんなのならどこぞ赤ゴリラのパンチの方が何百倍も効くね」

「上等だなら何百と殴り続けてやるよ」

また殴られかけたその瞬間精一杯彼は力を込めて、上半身だけジャンプさせて振り下ろされた拳に向かって嘯みついた。

「いつてえええええ」

痛みの叫びと抵抗できないと思っていたのにまさかの抵抗で抑えていた二人に動揺が生まれその瞬間を逃さず拘束を解いて抑えつけていた二人を殴り飛ばした。

「僕の事を問題児だとかバカと好きに呼べばいいよ。」

立ち上がり、先程まで地面に抑えられていたために彼は服から土埃を簡単に払った。

「実際、僕は頭は悪いし問題ばっか起こしている。ハルにもたくさん迷惑をかけちゃっているしね」

肩を動かし腕を回して先程まで拘束されていたので窮屈な思いをしていた体を簡単にほぐし始めた。

「でも僕は君たちの様な事は一度もしてないよ」

口の中にたまっていた血を外に吐き出す。余程殴られていたのだろう口の中は血の味でいっぱいだ。

「だから君達みたいな卑怯者と同じにされるよりは何倍もましだあああああ！」

あの喧嘩から三日経った。

現在、僕こと吉井明久は停学一週間の罰をうけ、中学三年生にとっては非常にまずい状態となっている。

あの喧嘩は僕が一方的に仕掛けたとあいつらが学校側に訴え、普通ならお互い怪我をしているために喧嘩両成敗と学校側も判断を下すだが、何分僕は教師陣の信頼がゼロ

なのでぼぼうのみ状態で可決に至った。

全くひいきもい所だよ、あいつらもあいつらで何だよあの顔は！今思い出しただけでも腹が立つ大袈裟に包帯をまいて教師に媚びるように泣き言を言いつけるあの顔。

今でも思い出すとじわじわと怒りが湧いてくる。その怒りを僕は

「ああああああ今思い出しただけでも腹が立つ！こうなりやスマブラでエンドレス組手だ！」

ゲームにぶつけている。

この三日間ずっと僕はゲーム三昧、ご飯食べてゲームをしてゲームをして寝る。基本はこんな感じ、だつて家で反省してきなさいって言われてあれを素直に納得できるほど僕は人間ができてない。

なので僕は聞いた限りニートにしか見えない生活を中三でやっている。

ただ1つのイレギュラーがあるけど

「アキくーん！」

「はいはい」

やれやれ今日も来てくれたのか、僕が停学し始めてから毎日彼女は足を運んでくれてる。

「今開けるよ」

最初の声だけで誰が来たのかすぐに分かった。

僕はすぐ様鍵を開けてお客さんを迎え入れる。

「こんにちはアキ君」

「やあハル」

艶やかな栗色の髪に、柔らかな微笑を浮かべる彼女は僕の幼馴染みの綾辻遥。学校でも人気が高く頭もいい、内の学校が誇る自慢の生徒会長でもある。

昔から面倒見がよく僕がいくら馬鹿でも根気よく勉強に付き合ってくれたりもしてくれた。今回もそんな感じで停学の間僕の世話をしに来ている。僕がここまで墮落した生活を送っていても学校に行ったり先生に反抗しないのはハルの存在が結構大きかったりする。

先程も言ったが彼女は成績の悪い僕の為に中一から勉強を見てくれたり、問題を起こしたら毎度説教をするなどある意味母親のようなこともしている。

「はいこれ今日の配布プリント」

「ごめんわざわざ届けてもらって」

彼女はこの三日間毎日授業ノートや配布プリントを持ってきてくれた。毎度毎度それはすごく手間なのに毎日続けてくれると本当に申し訳なくなってくる。

「別に気にしなくてもいいよ私がしたくてしてるんだし」

可愛らしくウインクを加えて彼女は笑顔で言った。その笑顔で学校の皆を虜にしたんだらうなでまあ無意識なんだろうけど。

「だからごめんよりも」

「ありがとう」

そういつたら彼女は満足そうにうなずき、さらに一枚のプリントを渡してきた。

「うん、後これも」

「なにこれ？これもぷりん…」

「うん、でも授業のプリントじゃないよ。今朝アキ君と喧嘩した人達が自分たちがアキ君に殴ったって言ってねだからアキ君の停学をとくってというお達し」

「嘘本当に！」

「ほんとほんと、よかったねアキ君」

僕は飛び跳ねるように喜びハルも拍手して一緒にこの喜んだ。

「本当によかったよ、このまま一週間停学していてもアキ君ゲームしかしないでしょ」

「おおっと、今回の停学中の僕の予定を簡単に見破られてしまうとは。」

だがそれをバカ正直にハルに言ってしまうと少しは勉強しなさいって怒られてしまうのはわかっている。

さすがに中学3年にもなって受験の前にこんな事件を起こしたんだ少しでも学力で

補填しないとガチでやばいのは僕も重々承知の上だ。

だけどわかってくれる人はいるはずだ誘惑には勝てないと！

「な、何を言ってるのかな…いくら僕だって中三何だから勉強もしつかり」

なので心苦しいですが嘘をつくことにしました。

そう言い続けるのだが、ハルはずっとニコニコしたままただ一言こう言った。

「嘘つくのは良くないよ」

僕は昔から思うんだハルの笑顔はとても魅力的で、僕も彼女の笑顔を見るのは好きだ。でもたまに…と言うより僕が嘘をついたり何か隠し事をしたりしていたら物凄く怖い微笑みを向けてくるのだ。

「な、何を言っているのさ！僕だって「アキ君」…最後まで言い訳させてよ」

「じゃあそうだね」

ハルはリビングの机の上に置いているテレビのリモコンに目をつけ、僕はその視線が何に向いているのか理解するとすぐ様子リモコンを抑える。

「アキ君どうしたのかな？」

「いやいや、ハルこそ何をしようとしているのさ」

「ちよつとテレビが見たくってね」

「ごめんちよつとテレビは今無理なんだ」

「へえーなんで」

やばい、少し誤魔化したいだけなのにハルの押しではいけない怒りのスイッチを押してしまったようだ。

この場合どうやって誤魔化そうか。

目標の物、テレビのリモコンは僕とハル両方の手の中にある。

僕がこの物を奪われテレビをつけられたらテレビをつけられ先程までのゲーム画面が映し出されてゲームオーバー説教タイムの始まりとなる。

なら、リモコンをハルから強奪するか、それが現実的なのか？今僕の手ミシミシ音立っているけど。

多分強奪を強行したら手の肉をつねりあげられてリモコンから手を放してしまい結局ゲームオーバー。

ならどうすればいいのか、あれちよつと待てよ。

今僕は重要な事に気が付いた。リモコンを奪った程度ではテレビ本体についているスイッチをつけられてどっちも終わりじゃないか！

危ない危ない、このことに気が付いてよかった。

僕が本当に守らないといけないのはテレビだ。

「ハル、いい加減に諦めなよ」

「アキ君こそ、これ以上抵抗するなら本気で怒るよ」

「っ、先に忠告しておくよ」

「ほう聞こうじゃないかアキ君」

「今、このテレビをつけると後悔する」

そう、後悔する。誰がとは言わないけど

この時、僕はやめておけと囁かれた気がした。

これ以上は地獄だ。そう警告する誰かがいる。

でも、僕は止まらない、諦めたりなんかしない。

だって、この選択はきつと間違えなんかじゃないんだから！

「Hなビデオを見ている最中だから！今つけると後悔するよ!!」

「ふーん」

この時ハルの怒りの着火剤が燃え上がった。

そして、燃え上がる炎をバックにして鷹の目も怖気づいてしまうような笑顔をしたハルが僕を見ていた。

その怒気に当てられた僕はその恐ろしさに猫のように震えあがってしまった。

「ふん！」

「いったああああ!!」

ハルが急に僕の手の肉を抓って捻りあげた。

ああああこの爪を食い込ませながら捻じりあげられるこれやつぱり超痛い！

そしてそのままリモコンを奪い取りテレビをつけさつきまで僕がプレイしていたゲーム画面が映された。

「アキ君」

さて、逃げるか

「逃がさないよ」

ハルは一度抓っていた手を離して今度は恋人繋ぎで繋ぎ直しそのまま僕の手の平を逆方向に押し倒す。

「いのででで」

ああ、女の子と指を絡めて力強く握りしめてくれる。なのになんでかな全くドキドキしない。

手に籠るのは彼女の熱じゃなくて痛みだけだし、今にも手首の骨を折りかねない、ハルさん僕の手はそちら側には曲がらないんだよ。

っていゆうか痛い！

「ヘルウウウプ！誰か助けて」

「アキ君、最初のはちよつとした嘘だからお説教も軽くしようかなって思ったんだけど、でも女の子にあの言い訳はないよ」

その後「デリカシーが無さすぎる!!」と怒られ30分間正座させられた。

そしてそのままノートもまだ写しきれてないあのもバレてさらに怒られてしまう。

僕はヘッドバットする勢いで床に頭を叩きつける人間の最終奥義土下座を何度もしてようやく説教タイムが終えた。

「ごめんなさーい」

僕は素直に机につく。そして何も言わずペンを取りノートを開け教科書をみながらハルの授業を真面目に受けることでこの場は丸く収まった。

その時の僕はまさに無心と言ってもいいぐらい、ただやれと言われたことをやり続けた。

授業をしてもう午後6時になっていた。ずっと勉強して僕の頭はもう限界だ。今も数字が頭の上を飛んでいる気がする。

説教の時、僕は数秒前の自分に警告するように後悔を呟いた。

やめておけと

それから僕はずっと正座し続けていた。

もう足は痺れ、膝も硬いフローリングの上のせいで痛くなってきた。

でも正座をやめられない、少し楽な体勢をとろうとモゾモゾ動くだけでハルのニコニコしている目のうっすら開かれる脛から瞳がこちらを覗いかされ、目だけで僕に反省、

してるんだよね？って伝えてきてそれだけで正座をとくとどうなるか結末を簡単に想像してしまう。

そんな時、僕んちのインターホンがなり玄関のドアが開かれた。

また誰か来たのかな？

「邪魔するぞで」

「差し入れ」

「あ、土屋くん木下くんも」

この2人は、僕の友達の木下秀吉と土屋康太だ。

木下秀吉、僕と同じクラスの友達で中学に入学してから知り合った中だけど僕のエンジェルでその容姿はまるでか弱い女の子のようだ。秀吉は自分を男だと言うがあえて言おう秀吉の性別は秀吉である！

土屋康太、通称ムツツリーニ好きな物カメラ趣味は撮影（盗撮）という生粋の変態である。だが彼の撮影する写真のレベルはとて高く僕もたまにほんとうにたまにお世話になっております。

「やあ秀吉にムツツリーニ」

「はあ、その様子からするとまた怒られたのか？」

そんな2人はぼくのこの星座を見ると呆れたように溜息を吐く。

「まあね」

どうやら僕がハルに怒られるのなんて秀吉達からしたら日常風景同然のことらしい。「相変わらず元氣そうで何よりだわい。」

秀吉の口調少しジジくさい、最初はこんな美少女がと思っていたけどこれはこれでまあいいかなと思えてきた。

さて早速秀吉の差し入れを見ると中はお菓子がたくさん入っていた。

「流石秀吉気が利くねお嫁さんに来る気は無いかい？」

そんな可愛い秀吉を僕はどうにかして落とそうとしてるのだが、流石は学校でも一二を争う美少女なだけはあるとてつもない鉄壁で僕の誘いを通さない。

「さてワシは男だじゃぞ」

「あはははは面白い冗談を言うね」

とこの下りは毎度何度もおなじみでクラスでもまたバカやっているなと思われたいのだが、見慣れたはずのムツリーニが肩をちよんちよんつついてきた。

「どしたのムツリーニ」

そしてそのまま無言で指を指している、あれ？ムツリーニが指さした方向から何か冷たいものを感じるぞ？

「アキ君、課題、倍」

うそお、何で!?

さて、色々あったがハルから出された課題もハルに見てもらって何とか終わりそうなぐらいまで来た。

ごめんねムツツリー二と秀吉も僕と一緒に勉強していた。僕が勉強している間普通にくつろいでいたのだがハルが何だったらまとめて見てあげるっていうハルのお誘いを断れず、完全に巻き込まれてハルの勉強会につきあわされていた。そんなこともあり誰も時間を確認していなかったのでも僕がふと時計を見ると、もう6時を超えて7時を迎えた頃にハルがこの家で晩御飯を作るから2人も食べないかって誘い出した。でも秀吉とムツツリー二が食べるとしても、客人で今日も勉強見えてくれているハルにそんなことさせるのは非常に申し訳ない。なので僕が作るって言ったらムツツリー二と秀吉は顔を明るくしたがハルだけは慌てて僕を椅子に座らせ僕が促されて

ハルはエプロンを身にまとい手慣れた手つきで料理を始めた。因みにムツツリー二も料理が上手いので手伝いをしてくれている。

そんな時僕がノートを写していると秀吉が僕のほうに寄ってきて声を潜めて話しかけてきた。

「さて、明久よ」

「どうしたの改まって」

「今回の事件発端はなんだったのじゃ？」

「……ふつ、僕の溢れんばかりの魅力に嫉妬して言いがかりを付けてきたんだ」

「……はあ要するに綾辻絡みでまた何か因縁を付けられたと」

「ちよつと待つて、なしてそんな事が分かるの僕ハルのことなんて一言も言つてないよね？」

「顔に出とる」

嘘でしょ、僕ポーカーフェイスには自信があるつもりだったのだけど。

僕もハルには聞こえないようそつと秀吉と会話し始める。

「前、ハルの買い物付き合つたところがあつてね。それがハルのファンクラブにバレて因縁つけられた。」

綾辻遥はモテる。容姿端麗文武両道これでもかというぐらいの魅力が彼女に詰まつている。その為彼女には学校でファンクラブが存在するのだが、多くのメンバーはただ純粋のハルを応援していたり、中には交際したいなどの願いを抱く人もいるようだがそれでもこんな魅力的な少女だ男なら普通に思うだろう。

だがこのファンクラブ何分数が多すぎる、学校の3分の1と言つてもいいぐらい彼女のファンは多くて、そして多い分困つた輩もファンクラブに紛れ込んで至もする。

僕は元からバカでハルとは釣り合わないそんな事は百も承知だが、僕にとつてハル

は一番の友達なのだから僕は友達としてハルといえるだけだ。

今も楽しそうにムツツリーニと料理をしているハル、多分このことを知ったらハルは悲しむだろう。別にハルが悪いわけでもないのに僕が思うよりも自分を責めると思う。ずいぶん長い付き合いだし

「バカじゃな」

「知ってる」

「やれやれ優しいバカは損するなでも綾辻に感謝するのじゃぞ」

「え？」

「今回の件の目撃者探しや、明久に有利な証拠をずっと探しておった。事情も深い内容もよく知らないがそれでも一番心配していた。お主の停学が短くなつのは綾辻のおかげじゃ。」

僕が家に籠ってゲームしている時も、彼女は僕の事を信じて無実の証拠を探してくれていた。

全く、これだからハルには心配をかけたくないんだよ。

「ほら手が止まっておるぞ早く課題をやれ」

「うん」

僕はムズムズする気持ちに気恥ずかしさを感じながら、ハルが出した課題に向き合っ

た。晩御飯までには終わらせないとね。

そしてわいわい、四人固まってハル達が作ってくれた料理を食べながら楽しい会話を盛り上がっていた。

食べ終われば今度は僕と秀吉で食器や料理に使った道具を洗った。

そんな事をしていたらもう時間は八時を超えており僕は暗くなっているのでハルを送っていくことにした。

因みに秀吉達は全く逆方向なので僕の家を出た時点で別れた。

「それでさ、その子ったら頬にご飯がついていたことに気が付かなくなつてさ」

他愛ない会話をしてくる彼女はいつもそうだった。僕に何かあると絶対隣に立つて話しかけてくれた。時には励ましてくれたり、何も話しかけずただ隣にいてくれた時もあった。そして今回のように他愛ない会話で僕の心を癒そうとしてくれたりする。

だからいつも僕は彼女に

「ありがとう」

彼女が幼馴染みであることに感謝しているのだ。

「え？」

「秀吉に聞いたよ。学校で色々してくれたんだよね。」

「ああ、その事」

足を止めハルは僕の方を向いた。そして僕も少し俯きながらハルに体を向ける。

「でも、それは私にだけ言う言葉じゃないよ」

「え？」

「今日朝学校に着いたらね下駄箱に事件の時の写真や職員室に行くとき事件の人達が自分達がやりましたって自白していたんだ。多分それは」

「そっか」

本当に格好いいな羨ましいよ。

「アキ君いい友達もったね」

「明日、ジュースでも奢るよ、でも先に」

「え」

僕はハルの両手を握りしめ先に目の前にいるかけがえのない幼馴染みに

「ありがとう、いつも僕を助けてくれて」

感謝を伝えた。

それと同時にものすごく恥ずかしいことをしている事に気がついた。

「(い)い(い)い(い)めんなさい！」

つい昔の癖でハルの手を握ってしまった。やってしまったさつきデリカシーがな
いってハルに怒られたばかりなのにこんな小さい時のくせで手を握るなんてこんな

のハルの事を小さい子供として見てるようなものじゃないか。

ううハルに引かれてないよねハルに多分ハルに嫌われたら立ち直れない自信がある。

「まって」

すぐ様手を離そうとしたがハルがギュツと握りしめてきた。それは先程のような力任せのようではなく優しく彼女は僕の手を握りしめてくれた。

そして僕は上を向き彼女を見た。そしたらハルは瞳を潤まながら恥ずかしそうに視線を逸らす。頬は少し赤く彼女は色白だから少し赤いだけですぐに目立つのだ。

「アキ君はさ、何で私がいっつも君の助けをしてるかわかる？」

「え？それは幼馴染みのくされ「違うよ」」

何だろ、今のハルはいつもと違うような感じがした。

ハルは成長期を迎えるとすぐに体付きは女の子っぽく育ち、見た目は同年代の中では一番大人っぽく見える。だけどそれでも中身はあんまり変わらず昔の感じを残しており時折ごく子供っぽい時だつてある。

だけど今の彼女は普段の彼女から感じられないような色気みたいなものが感じられた。

そんな彼女ら僕の答えを遮るようにして、ハルは自分の声を被せてきた。

その後すぐに僕の耳元付近でその答えを囁く。
「私は、私があき君の事が大好きだからだよ」

第二話

停学があけて僕は三日ぶりに学校に行く。

だが、僕は今日の授業いつもより気が抜けてしまっていた。

頭の中がモヤモヤしていたせいだ。

その理由は絶対昨日のことのせいだろう。昨日の夜から授業が終わる今までどこか上の空で過ごしていた。

だから先生に急に呼び出された時も独り言のように返事して今こうして廊下を歩いており、まさか職員室に呼び出されたときあんなこと言われるとは思っていなかった。

「吉井君、君ね多分高校は無理だね」

「え!?!」

急な宣告僕の頭は爆発されたように色んな考え事が吹き飛んだ。

困みに僕がどんな顔をしてるのかと言うと燃え尽きたように真っ白で今にも崩れ落ちそうな状態である。

なんで進学が無理だと言われたのか

吉井明久はバカであり、更に内申もそこまで良くなかったのだが、今回の事で風前の

灯火だった内申は灰まで廃れた。

「まあ、君は元々進路について積極的じゃなかったから少し離れた高校でも紹介しようかと思つてただけどどうも目ぼしい所もあらかたむりになつたんだよで困つたことに」

先生が言うには三門市の高校は最近偏差値も上がり始めており、元々僕の学力では結構厳しくて専願私立なら何とかといわれていたのだが、この時期に問題を起こすような生徒なんてどこの高校も入れたがらない。学力がなく内申が消え去つたことが追い打ちとなり、いよいよ狙うとしたら少し離れた私立しか選択肢に残っていない。

「先生離れた高校とかだつたら行けるんですか?」

「そこまでは断言できんさ。ただマシだろうっていうだけ」

「そうですか」

「おん?なんだいその顔」

「え?」

「や、いややつぱり何でもなし。とにかくこちらもあらかた目星をつけとくけど、自分でも探しときなさい。君の進路なんだから」

そう言われ僕は職員室を出た。

僕は下駄箱で靴を履き替え、グラウンドを歩き校門から帰路へ歩く。

僕は今どう思っているのか。

いままで考えた事もなかったけど、こうモヤモヤしてるっていう事は僕にも行きたい学校なんてあったのかな？

先生に言われた内申の話、僕は今までバカなことをしてきたという自覚はある。下らない事で喧嘩して先生に目をつけられ怒られ、ハルに迷惑をかけた。

それでも中学はそれなりに楽しかったと思う。バカをしたけど秀吉やムツツリーニ達と出会い今まで過ごしてきたが悪くなかった。

でもその代償が今の現状で、楽しくて後悔がないはずなのに何だろうこの言い表せないモヤモヤした気持ち、それが僕の中で渦巻いている。

「うーん、スッキリしないな」

今の今までこんな気持ちになったのは初めてだ。

僕はどうしたいのだろう。高校に行きたいのなら別に三門市に拘ることは無い、先生が言ったようにどこか遠い高校を探せばいい、何もここに拘る意味は無いのだ。

でも

(私は、私がアキ君の事が大好きだからだよ)

はあとため息を吐く。

この前ハルに言われたこの言葉、僕はこの言葉を思い出すと決まって顔が熱くなっし

まう。

ハルとは長い付き合いでハルが冗談でこんな事を言う人じゃないというのによく知っている。

だけど、ハルが僕に恋愛感情があるなんておもってもみなかった。

僕とハルはただの幼馴染み腐れ縁とまではいかないけど、昔から仲が良くてよく遊んでいた。お互いの家に泊まった事だってあるにはある。

でも、それは子供付き合いであって異性として意識してこなかったから僕ができたのかもしれない。

やばい、また僕の顔が熱くなってきた。

「ああああああ頭がショートするう。」

多分今僕がモヤモヤされている全てはこれにつながっているんだ。

「おいおい、ねえ頭使って何してんだよついに壊れたか?」

「え、この声は…」

「よう明久」

「雄二」

坂本雄二、僕とは同じ中学で僕と同じくらい教師を困らせている生徒だ。僕とは腐れ縁みたいなもので気があったのかいつの間にかよく一緒にいる。

でも最近学校で話す機会がなくなっており、久々に会話をした。

「やあ、雄二久しぶり：。だね」

久しぶりに会って早々僕は雄二の腹に力を込めた一撃を入れる。

「いふ」

最近まともに会えてなかった。だが前あつた時その時僕は彼の口車に乗せられ不良の溜まり場に置いていかれたのだ。

忘れたとは言わせない。

「おいおい、明久久しぶりだからって随分手厚い挨拶だな！」

「が」

雄二は仕返しに僕の腹に同じように殴ってきた。

久しぶりに会っても相変わらずの馬鹿力だね、いや少し強くなっているような気がする。

「てめえ久々に会っていきなりなにしゃがる！」

「うるさーい、貴様に不良の溜まり場に一人置いてきぼりにされた僕の心細さがわかるか！」

「あれは、元はと言えばお前が不良どもに目をつけられて近くにいる俺を巻き込んだんだろ！」

因みにこの2人このようによく喧嘩したりもしているので、友達と言うより悪友に近い関係である。

「ぜえぜえ」

「はあはあ」

「今日は」

「この位にしてあげるよ」

あれから殴ったり蹴ったり完全に小学生のように暴れ回って僕も雄二もだいぶ息が上がつっていた。

お互い疲れきっている顔を見ると

「くく」

「はは」

「さて、改めてどうしたんだよお前」

「何が？」

「さっきまで似合わねえ面で一丁前に悩んでたんだろ？バカが似合わねえこととしてんじゃねえよ」

「ちよ、人を見るなり何度も何度も馬鹿とは失礼にもほどがあるぞ」

「わかったわかったよ。」

「はあ実は」

僕と雄二は取り合えずここから離れて自販機でジュースを購入して近くの公園に入った。そして僕はここ最近のあったことを話した。まあ流石にハルのことは話さなかつたけど恥ずかしいしこの事はハルも広められてほしくないだろう。

「はははははははははは」

内申学力共に低すぎて進学できる高校が近くにないって言ったらこの通り大爆笑された。ちくしようやつぱり貴様は変わらないな、少し前のしおらしい自分を殴り飛ばしたいこいつに言うんじやなかった。

「なるほどな、けど意外だな」

「何が」

「お前の場合、高校なんて通えたらどこでもいいと思つてたんだがな」

「そりや以前はね。でも今は」

流石にここで僕は会話を切る。あぶないあぶない

「？」

「何でもない」

「ふーん」

「そーいや綾辻には相談したのか？」

「ハルに」

「あいつならお前の相談なんて大歓迎だろうに、それにしっかりと答えてくれるしな。」
「う」

「どしたー、まさか綾辻とも」

「なにも… なかった」

顔芸で「まかそうとするが

「なぜ三刀流ふうに」

「何も無いよ。」

「言い直さんでいい、それで綾辻とは何があつたんだよ」

「ちよつと何も無かつたつて言ってるよね！」

「ふ、告白でもされたか」

う、僕はおもわず言葉が詰まりあの時の情景が目には浮かんでしまった。

「お、当たりか」

「だーもうそうだよされたよ告白！」

「あ、そうなんだおめでとー」

「おおい軽いな！さつき大爆笑したくせに」

「だつてなあ、人の恋路なんぞ俺に関係ないし。しよーじきやつとかーとも思つてたり

もするしな」

「え!? うそ」

「よく考えてみるよ、かたや学年一とも言える美少女、かたや世界一のバカなんだぞ普通に一緒にいる方がおかしい」

「ちよつと僕そこまでバカじゃないよお!」

何がむかつくつて、ハルは少しあやふやにしているが僕は世界一のバカだと断言しているところが余計にムカつくんだよ。

「まあ、悩みはわかった。要するに綾辻と高校で離れ離れになりたくないんだな」

そうなのかな、そうなんだよな。多分僕が進路のこと考えるとどうしてもハルのことを頭に浮かべてしまう。

「因みに綾辻はどこ行くつて?」

「六? 館」

「諦めろ」

「速いよ! バータの如く速い!」

もうちよつと悩んでよ! そして希望を持たせてよ。

「つて言いたい所だが手がひとつない訳でもない」

「え!? ほんとにリエリー?」

「Reallyな、何だよりエリーって」

自分の後輩キャラが人気な声優です先輩！って言ってる自分に寒気がしてきた。

「明久よ。俺がなぜ最近学校休みがちだったかわかるか？」

「バイトじゃなかったの？」

「大っぴらに言えばそうだ。だが前までのバイトは年齢バレてクビになって今はボーダーで世話になっている」

「っ!？」

なるほどね、確かにボーダーなら学校よりも雄二は優先するだろう。

「けど意外だね。雄二はボーダーだけはないってずっと言ってたのに」

「俺もそう思うよ、でも今はそこしか働き口が無くなってな」

「雄二がボーダーで働いてる理由はわかったよ。でもさっきの話とボーダー繋がるの
よ」

「いいか、ボーダーの正式な隊員として入隊して活躍している学生にはボーダー推薦って言うのがあるんだ」

「ボーダー推薦？」

「簡単に言うとボーダーと組んでる学校があつてそこではボーダーで働いてるってだけで受験でいい評価される制度があるんだよ。六？館も確か入ってたはずだ」

「ボーダーに入っていると受験しなくても入れるってこと！」

「そんな楽じゃないけどな。多分そこまで楽なのは綾辻並に優秀な生徒じゃなきゃ無理だ」

「ハル並か」

「それともうひとつ、俺も入ってた結構立つがやつとこさ正隊員になったばかりだ多分今から入ったのじゃ結構ギリギリだ正直これもいい手とは言わないし、オススメもしないもう一つ手があるって言うだけだ」

「…」

「まあ、どうするか考えるんだな」

そして僕達は今日のところは解散した。

僕は家に帰り、雄二は防衛任務なのでそのままボーダーに基地に向かって行った。

家につけると僕はゲームをつけずにふと窓の外から見えるボーダー本部を眺めていた。

ボーダー、すぐ近くにいた僕達の平和を守ってくれているヒーローみたいなものだと僕はずっと3年前のあの日から思っていた。

だから、僕も憧れみたいなものだったしやってみたいなと思うことだった。あつた… けれど

「それでもやろうとした事は一度もないんだよね」

そしてそれから現在の警戒区域内の方を見る。

今ではネイバーが出現するゲートをあどの区域内だけに抑えているのだが、あの区域内も以前は人が住んでいた。僕の前任んでた家だつてあの中にはある。

小さい頃は不満があった。何で前から住んでいた家を追い出されなければいけないのか理由がよくわかってなかったから、けどいま住んでる所もボーダーが自分たちの資金を使つて僕達に住むところを与えてくれた。

でも、あの頃の思い出はずつとあの戦場の中に置いていったままなんだ。

「おつと、そろそろご飯の支度しないとね」

考え事しすぎていつの間にか6時になってしまつていた。

そろそろご飯といで炊かないと遅くなっちゃう。

「あれ？これハルのノート？」

昨日返し忘れたらしい、悪いことしたなこの授業なければいいんだけど、すぐにでもあ返した方がいいよね。

「時間は6時半か、この時間ならハルも家に帰つてるだろ」

「まあ、行くか」

正直ちよつと顔を合わせたくないというか、恥ずかしいというかなんというか。

「でもノート渡すだけだしぱつと返してぱつと帰ろつと。」

ハルの家はここからだとして少し距離があるが、歩いて15分ちよつとの所にある。

そしてつくと僕はインターホンを鳴らして出てきたハルの親の話聞いて少し驚いた。

「え?!まだ帰ってない」

ハルは性格が真面目なため、帰りが7時以降になりそうだと家に連絡を入れているのだが、今日はまだ連絡を入れてなくて親も心配している。

「わかりました、少し学校とか見てきますね」

そう言つて僕はハルの家を出てハルが使いそうなルートから学校へ向かう。

「変だな」

先生の手伝いだつたらこんな遅くならないだろうし、生徒会の仕事なら今は引き継ぎの準備をしているだけつてこの前言つてたし、他に何かしているのかな。

「うわああああああん」

とそしたら右から子供の鳴き声が聞こえてきた。

「どうしたの?」

いけない、つい癖でハルを探していたのについてもこんなに泣いてる子放っておけないし

「うわあああああ」

「よしよし、ほら泣かないで」

「うう」

「よしよし、ほらお兄ちゃんに話してみてどうしたんだい？」

「お兄ちゃんが」

「僕!？」

「違う私のお兄ちゃんが隠れんぼ途中でいなくなっちゃって」

「お兄ちゃんと隠れんぼしてたんだ。こちら辺で？」

「ううん、あっちの方」

「あっちって警戒区域内近くじゃないか……まさか」

嫌な予感がしてきた。

「そしてそれを少し前に来たお姉ちゃんに話したら」

さらに嫌な予感が強まる。まさか

「お姉ちゃんってどんな子！」

「えっと……髪は短くて茶色？みたいな色の髪の人」

「君はここにいて！いいかい絶対動いちゃダメだよ!!僕が君のお兄ちゃんを連れてきてあげるから」

ハッキリとわかる、髪の色と警戒区域内であるにも関わらず子供を助けに行く何て、そんな無謀なことをする人なんて一人しかないよ。

「ハル！」

僕は警戒区域内に迷わず突入する。もううんとかすんとか考えていられるか！幸い今ネイバーが現れるゲートは開いていない今のうちにハルとあの子のお兄さんを引っぱりださないよ…

ゲート発生！ゲート発生！

「フラグかよチキショー！」

まずい今考えたらあんなのゲート出すよフラグじゃないか、しかも僕からでもみえる距離にゲート開いちやつてるよ。これはモタモタしたらハルじゃなく、ハルを見つける前に俺が襲われそうだ。

「落ち着けー落ち着いて考えろ吉井明久、貴様のその明晰や頭脳はなんの為にあるのだ今日この日のためであらう」

ダメだーちくしょう、落ち着けしか頭に浮かばないよ。

「うおお、このどうすれば」

よく考えるんだ吉井明久よ、こうなればわかることだからかんがえ…待てよ。

「ここら辺って確か」

小さい頃よく僕はハルと追いかけてっこしていた。

ハルは僕に負けず劣らずのわんぱくっ子で、男の子のような遊びもとても大好きでどちらかと言うとハルの元気さに僕が振り回されていたことの方が多いうらいた。

そんなハルは、母さんに家の前で遊んどきなさいと言われても追いかけてっこをしたら絶対離れた場所までできて隠れて追いかけている僕を驚かすために待ち伏せしていた。

「そっか、ここら辺」

もしかしたらハルは、いや絶対ハルならよく隠れたあそこに身を隠すだろう。

この道をまっすぐ行って曲がり角を左に曲がる。住んでいた人がおばあちゃんやおじいちゃんだったから和風な感じのあのいへの門柱の影、ふう

「懐かしいね」

「!？」

「ここに住んでいた夫婦、よく勝手に侵入していたハルに怒りもせずお菓子を上げたり、将棋をしたりもしたね。」

「あ、アキ君」

「見つけたよハル、さあ帰ろう」

「アキ君なの」

「他に誰に見えるのさ……おっと、君だね妹を泣かせる悪い子は」

「え？」

「君の妹ずっと泣いてたよ」

「ごめん… なさい」

「よし、帰ってから妹にもちやんと謝ってね。さてとさっさとここから逃げますか… 隠れて!!」

僕はハルを抱きしめて、小さい子を引つ張り門柱の影に身を潜めた。

「今、向こうにいる大きなネイバーがこつちを見てる。こつちから出るのは危険だから裏に回ろう」

そう言うと、ハルも男の子も小さく頷き裏に回り塀の前に立つ。

「いいかい、僕が先に様子を見てから道に出る。そしてハルが男の子を持ち上げて僕の方にやってから最後にハルが出てくるいいね」

2人とも頷き了承を得た。

僕は一旦塀の向こう側の様子を覗う。ネイバーもいないし今なら大丈夫だろう僕はひとつ飛びで塀を超えてハルに声をかけた。

「さあ早く」

「うん」

男の子を受け取り、最後はハルなのだが、さすがに制服でスカート姿の彼女はどうし

でも動きがぎこちなくスカートを気にしてしまつて大胆に動けない。

「ハル！手を伸ばして」

「え…」

僕はハルが両足を扉の上に乗せたのを確認するとすぐ様自分の元に引つ張つた。

そして勢いに任せるだけのハルを受け止め地面に立たして

「行こう」

そのまま彼女と男の子手を引つ張つてまた住宅の隙間に入る。

そのままこの道を駆け抜けたいところだがここは見通しが良すぎて危険だ。しかも3人となるとどうしても安全確認してからじゃないと次の行動に移せない。

そして時を同じくして先程の大きなネイバーがボーダーの隊員と戦闘を開始した。図体がデカイ分あのネイバーの攻撃は結構離れた所まで飛んできている。

「あっちが早く片付いてくれると楽なんだけど、仕方ないハル向こうへ回ろう」
「わかった」

だが、こちらもちちらで問題があつた。

「まずい」

向こうの道には誰も戦っていないネイバーがいた。

これはどうやっても無理だな。

「うう、まさに前門に姉さん校門に母さんだよ」

「アキ君、こんな時に言うのも何だけど自分の家族にそれはないんじゃないかな」

だって仕方ないじゃん、多分僕の大家族ネイバーより怖いよ。僕を恐怖のどん底に突き落とされたら原因は絶対あの2人だね断言できる。

と無駄話をしているんじゃないかな。

不味いことにあのネイバーはこちら側に歩いてきている。多分向こうの戦闘が終わるのを待っていたらこつち側のネイバーは僕らを見つけているだろう。

そうなってしまうては遅い。僕だけならいい、だがハルやこの男の子は絶対警戒区域内から出してあげないと

ならやる事は単純だ。

僕は大きく深呼吸して呼吸を落ち着かせて緊張を和らげた。

「ハル」

「アキ君？」

「今から言うこと絶対聞くんだよ」

僕が何を言おうとしているのか、ハルはすぐにわかったのか目を見開き驚いている。

「アキ君… まさか！」

動揺するハルに僕は、頬に手を当てて優しく撫でてあげる。

ハルはとても強いが脆い面もあった。天然でまったりした性格だが無茶する僕を心配する程が深い子だった。

だから、僕は誰よりもハルを守りたいんだ。

「大丈夫、僕が居なくてもハルなら」

逃げ切れる。そう言おうとしたけど僕は言えなかった。

多分こう言ったら、ハルには決死の覚悟でネイバーに挑むんだ。そう聞こえるだろう、それがわかってしまい僕は言葉を紡げなかった。

「大丈夫じゃないよ！昨日言ったよね。私はアキ君の事が」

今にも泣きそうな顔の彼女、僕のために泣いてくれる優しい女の子。僕は今から命をかける、ハルはその思いに気付いて僕を止めようとしているが……

アニメや漫画なんか見ていたら思う。命をかけた戦いの前に主人公の覚悟の前に泣き続けるヒロイン、今なら主人公の気持ちがあわかってしまう。だってこんなに優しい女の子男なら命をかけて守りたくなるじゃないか！

「ハル」

「アキ……君」

「僕は君を守る、絶対何が何でも君を守るから君はその子を守ってあげて」

僕は今ハルと額同時をぶつけ合っている。

ハルの温かさを感じる。ハルの呼吸音が聞こえるぐらい近い距離で、僕はこの場を凌いでハル達を逃がすためハルに大丈夫だと囁いている。

「覚えているかい？小さい頃泣いちゃった僕をハルがこうやって強くなるおまじないって言つて慰めてくれてた事。」

「……覚えてるよ、アキ君つて昔から何事も顧みないで突つ走つていつちやうからよく私を泣かした上級生とかと喧嘩して負かされた時とかよくこうやっていたよね。」

ああ、今ならよくわかる。この額に感じる熱がとても……とても

「今度は僕が君に強くなるおまじないをしてあげる」

そして僕は彼女に告げる

「僕も君の事が好きだよ」

そして告げると同時に僕はハルから離れてネイバーの元に走っていった。

「こつちだネイバー」

周りに響くぐらいいきな声をネイバーに叩きつける。

するとすぐさまネイバーはギョロリと僕を認知して鎌を振り上げ威嚇してきた。

「へ、捕まえられるものなら捕まえてみる！」

あいに僕は逃げ足には自信があるんだよ。

ただどあちらもさすがに速い、ネイバーは蜘蛛のような走り方で僕を追いかけてく

る。この僕は右斜め前にある細い道に入り込んだ、これならあのネイバーも…

と思ったのだが壁を砕いて侵入してきた。

「コラー大工さんに謝れー」

これなら道が細かろうが見渡しのいいぐらい大きかろうがあんまり変わんない。

「でも、舐めるなよ！僕は人生の殆どから逃げ延びたんだ。そんな僕の逃げ足がネイバー如きに負けるもんかー！」

今にもウガーと叫びそうなぐらいまるで野生児にまで退化したかのような僕の逃げっぷりはあのネイバーともいい勝負していた。

現在はまだ脇目も振らずに警戒区域内を走り回っている。

「バータを超えろ！僕は今デイスポになるのだ吉井明久よ」

って何言ってるんだろ僕は、デイスポでもバータでもどつちでもいいからとにかく逃げろ。

このネイバーをハルから遠ざけるために

「次の角右だアア」

この時の僕の頭に入っていたのはハル達からこのネイバーを遠ざける事だけだった。だから僕自身のことなんてこれっぽっちも考えておらず、だからだろう僕は逃げれば逃げるほどどんどん警戒区域内の奥に行っていたのだ。

「うお!？」

だが気がついた時には既に遅く、逃げた先にはあ別のネイバーがたちふさがっていた。

見た感じさつきまで追い回されたネイバーと同じくやつだ。クモみたいに足が多くてあの前足部分で攻撃するんだろう。しかもさつき壁にぶつかった時にわかったことだが、多分あのネイバーは超硬い、ぶつかった壁は粉々だがあのネイバーには傷一つ入ってない。

元々ネイバーに僕達の攻撃は届かないので抵抗なんて意味ないのだが実際知ると絶望感が半端ない。

「あ、はははこれは参ったね」

両側のネイバーは示し合わせたかのように同時に襲いかかって来る。

僕は同時なら、この2体をギリギリまで引き付けて……振り下ろしてきた所を回避。

よしこれでネイバーの後ろ側ががら空きだ。

だが、その隙間はすぐにネイバーによって埋め尽くされた。

「え!? うわあ」

突如先程のネイバーが上から降ってきた。

このネイバージャンプ出来るのかよ、それにただジャンプしただけなのに衝撃が

「くっ!？」

ネイバーのジャンプに吹っ飛ばされそうになっているのを何とか耐えていたが、ネイバーはもう一体いる僕はチラリと後ろのネイバーを確認するともう一体のネイバーが僕に向かって突進し始めた。

「まずい」

だがこの今の僕の体勢からネイバーの攻撃をかわすのは無理だ。

「ならば」

小さい抵抗かもしれないが後ろに飛んでネイバーの突進攻撃の威力を緩和させようとした。

だけどネイバーの攻撃は予想よりも重くてとても強力だった。

(何だこのデタラメなの車かよ)

「ぐ、がは」

やばい、もう足が限界で逃げれそうもない。

まずいな、ここまでなのかな。

あああ、こんなんじやハルに怒られるなあ自分を大切にしろーって。

けど、説教も聞けなさそうだ。

ごめんねハル

「トリガー起動」

瞼を閉じかけた時ふと男の声が聞こえた。

どこか飄々としているのにも関わらず、でも何だかとても悲しんでいそうな感じの
声が聞こえてきた。

「すまないな、到着が遅れてしまつて。行きはしているか少年」

「あな：たは」

「俺は迅、迅悠二一応ボーダーきつての実力派エリートだ」

第三話

「よつと、少年肩を貸すよ」

ネイバーに襲われ警戒区域内で追い詰められた僕は目の前の迅つて人に助けられた。僕は迅さんに立ち上らせてもらいゆつくりと歩き出す。

「ありがとう、ございます」

「これぐらいいいってことよ、ほら君のガールフレンド達が外で待つてる」

「ハル」

「よく頑張つたな少年、君のおかげであの2人は助けられた。君があそこで自分を盾にしないとあの2人はどうなっていたことか」

「いえ、当たり前のことでしただけです」

そう面と向かつて言われると、なんかこそばゆい感じがする

でもよかつたハル達は先に保護されていたのか。

と、ここで僕は一安心すると緊張が抜けて余計体の力が抜けてしまった。

膝を崩してしまい地面に跪いてしまった。

まああんなに走つて最後は突進されたもんな、自分でも呆れるぐらい体が硬いなあ。

「おっと」

「あ、すいません」

「大丈夫大丈夫、俺が君を背負うからしつかりと掴まっているんだ」

僕は、迅さんにおんぶされたので彼の体にしつかり掴まる。

「さて、ひとつ走りで一気に抜けるぞ」

すごい、まるで自転車を飛ばしているぐらいのスピードが出てる。これなら確かにすぐに警戒区域の外につきそうだ。

迅さんの言う通り、彼の背中に掴まっていたら本当にひとつ走りで警戒区域の外に出ることができた。

あれからネイバーに出会うことも、トラブルが起こることなくハル達に合流する事ができた。

「アキ……君」

「ただいまハル」

ハルは僕の顔を見ると、迅さんに背負われているにもかかわらず僕の首に両手を回して抱きしめた。

「よかった、無事でよかったよ」

「痛い！痛いよハル」

ごめん、なんか色々ごめんって思うけど僕怪我しているんだよ。もう少し丁寧に扱って欲しいよじゃないと怪我に響いているし。

でも、結構心配させてしまったんだよね。ハルがこんなに悲しんでる何ていつ以来ってぐらい心配している。

「おお情熱的なハグだね。少年少し下ろすよ」

そう言うのと迅さんは僕をハルに預けた。

ハルにもたれかかった僕は、余計な力が入らずただハルが抱きしめるのを受け入れていた。

「くる、苦しいよハル」

「あ、ごめん」

ハルは慌てて僕の抱擁をとき同時に真つ赤に顔を染めた子供とニヤニヤして暖かい目でこちらを見ていることに気がついてハルと僕も顔が赤くなってきた。

「あ、助けて頂きありがとうございます」

「ありがとうございます」

「いいよ、俺が遅かったから少年をこんなに怪我させてしまったんだ。寧ろ俺が謝らないとすまない」

そんな、命の恩人に頭を下げられる何て。

僕もハルも慌てて迅さんに謝罪を取り下げさせようとする。

僕達の慌てた姿に迅さんは柔らかい表情になり僕達を家まで送ると言ってくれた。

「さて、じゃあ少年の怪我もあるし俺が君達を家に送るよ」

僕も一人では歩きにくいしかと行ってハルに介抱されるのも、女性にはだいぶきついだらうから迅さんがそう言ってくれたのはすごく助かった。

そしてまずは今回の事で警戒区域内がどれだけ危険かわかった子供達を親御さんの元に、次にハルを家まで送る。

「じゃあ、ハルおやすみ」

「うん、アキ君今日はありがとう」

そう言い残してハルは自宅に入り、僕は迅さんと2人きりになった。

迅さんに肩を貸してもらいながらゆっくり帰っている最中僕は迅さんにある質問をした。

「迅さん」

「どうした？」

「ボーダーってどんなどころなんですが？」

「…何だよ、ボーダーに興味があるのか？」

「…はい」

「そうだな、最近は組織の規模も大きくなって人数も増えてきた。訓練内容も充実しているし人が増えて来ている割には増えた人数にあわせて様々な新しい物や制度もどんどん増えていってボーダーはもつと大きな組織になる筈だ。少年君はどうしてボーダーに興味を持ったんだ？」

「僕は」

僕が下を向き言葉が詰まると迅さんはこちらを覗くようにして顔を近づけてきた。

しかも飛びつきり何か含みのある笑みで

「にいい、当ててやろっか」

「はい？」

「あの女の子だろ？可愛いからなあの子」

「う」

「で、少年はどうしたいんだ。今日みたいな事からあの子を守りたいのか？それともただボーダーに入ってたカッコイイってアピールしたいのか？」

「どっちかと言うと後者…かな」

「へえ、そりゃ意外だ」

僕がボーダーに興味を持ったのはハルと同じ高校に行くため、だから雄二、僕の友達がボーダーに入った事やその友達からボーダー推薦があると聞いたから僕はボーダー

に興味を持った。

そう迅さんに話した。

うう、顔を上げることができない、物凄く自分本位だしあつてまもない人に自分はバカだつて言つてるし

「ほんとごめんなさいこんな変な理由で、他に真面目に戦っている人達にも悪いですよ
ね」

やっぱり恥ずかしいなこんな理由なんて、不純にも程がある。自分ことばかりでなくて恥ずかしいんだろ。

ああ、穴があつたら入りたいそしてそのまま埋められたい。

「少年」

「なんですか?」

「あげせん、食う?」

「え?」

迅さんはいつの間にか手の持っていたあげせんを僕に進めてきた。

つてかそのあげせんどこから取り出したの?

「ほら、どうだ美味いぞ」

「い、頂きます」

「少年、さつき言ったようにボーダーはだいぶ大きな組織になった」

「・・・はっ」

あげせんを袋ごと僕にくれた迅さんは

「だから、最近はお色んな入隊理由で入ってくる人達もいる。ネイバーに復讐だったり、たんにお金を稼ぎたいだったり、そしてボーダーに入って目立ちたいなんて奴もいるくらいだ」

何か意外だった、僕が思うのもあれなんだけどそんな理由で入る人がいるんだ。

もっと厳しく市民の為に命張れるとか、ヒーローみたいにただ守り続けたいとかそんな理想みたいな人達ばかりだと思っていた。

「少年、ボーダーにとつて始める動機は本当に何でもいいんだ。君のように純粋な恋でも、強くなり続けて、そして結果を出すことができるそんな人を望んでいる」

「じゃあ、僕には向いてませんね」

産まれてこの方僕は結果なんて出せたことは無い。ただがむしやらに周りを巻き込んで色んな人に迷惑をかけたそんな生き方を10年以上していたんだ。

そんな僕に・・・向いてるわけ

「俺は、そうは思わないよ」

「え」

「今日の事、本当にとても危険で君は死んでいたかもしれないだから褒めるべきじゃないんだけど、君は守りたいって思つて自分の身も顧みないで警戒区域内に侵入、そして彼女達を逃がすためにトリオン兵に立ち向かつた。君が勇気を振り絞つたからあの子達は無事つていう結果につながつたんだ」

「!？」

「今日彼女達を守つたのは俺じゃない。少年！君なんだぜ」

僕は、生まれて初めて人に賞賛された気がする。

いつも怒られ、反省しろとか謝れとかお前のせいだとか散々言われたけど、この人は誇れと言つてくれる。

なんだろう目頭が熱くなつてくるやばい涙が止まらない。

な溢れ出涙は決して悲しいとか怖かつたとかそんなじゃない。ただ素直に認められた事が嬉しいんだ。心の奥が燦るこの感覚、むず痒いが決して嫌ではない。

でも恥ずかしい中三にもなつて、褒められて嬉し泣きとかすごく恥ずかしい。

「う、う」

両手で溢れてくる涙を拭く僕を迅さんは優しく頭を撫でてくれた。

その大きくて暖かい迅さんの手がすごく気持ちよくて僕は子供になつたかのように迅さんに甘えてしまった。

「おお、全く若いつていいな」

そしてそのまま泣きじやくる僕を迅さんは家まで送ってくれた。すぐく恥ずかしかつたけどすぐくいい時間だったと僕は思う。

「ありがとう迅さん」

「いいつてことよ、これ土産にやるよ」

そう言うのと、迅さんはまだ開封していないあげせんを僕にくれた。

僕はそれを受け取りまた礼をいいお別れの挨拶を言った。

「それじゃあ、おやすみなさい迅さん」

「ああ、とその前に最後にひとつ」

改まってまた迅さんが僕に何かを言おとしたから僕は迅さんと面と向かい迅さんの言葉を聞く。

「ボーダーに入るかどうかは君が決める事だ。だけどこれだけは言つとく、君がボーダーに入つて後悔することは無いよ」

「え？」

「これは俺が保証する。」

迅さんの言葉には何故かわからないが、信頼できる何かを感じられた。

不思議な人だ、そしてそれと同時に僕はこの人を今まで見たどんな人よりも格好いい

と思つていた。

「じゃあまたなアキ、いい夢見ろよ」

そして彼はトリガー起動の掛け声とともに夜の闇夜に消えていった。

そして僕は扉を閉めて暫くその場から動かなかつた。ただ何となく彼の後ろ姿がぼんやりと目の前にまだあるみたいに思つていたから、

(君がボーダーに入つて後悔することは無いよ)

僕はあの人の背中を追いかけてみたい。すごく格好いい大人になりたい。

そして僕は靴を脱ぎ貰つたあげせん食べて、電話をする。もちろん相手はあの子だ。

「もしもし」

『もしもしどうしたの アキ君?』

「家に無事着いたからその報告」

『そっか』

「ハルは今何してるの?」

『私? 私はいつもの様に勉強中だよ』

も今日ぐらいもう疲れてベッドで休んでいるかと思つていた。でもハルは今日怖い目にあつたにもかかわらず日課の勉強をしているとは本当に強い子だな。

「今日あんな目にあつたのに、さすがはハルだね」

『何それ？私だって怖かつんだよ。でも今不思議と安心しちやつてね逆に何かしかないと落ち着かないんだ』

「そう、それなら僕も安心できる。ハルにとつて今日がトラウマにならなくて良かったよ」

『… あ、あのねアキ君「ハル」なに？』

「聞いて欲しいんことがあるんだ」

『どうしたの？改まつて』

「僕、ボーダーに入隊したい」

『！そう』

ハルはそこまで慌てず淡々と呟いた。

「あれ、これって結構な告白じゃないの？」

『そうだね、でも不思議とやっぱりつて思うんだ。アキ君は多分ボーダーに向いてそうだから』

「さつき迅さんにも言われた。何僕つてそんなに軍人とか向いてると皆思つてるの？」

『ふふ、自衛隊とかは向いてなさそうだけどね。多分一日で規則破つてクビになつてそう』

「ちよつと！一日つて何さ僕もつと大人しいよ、しかも規則破つて速クビつてどんなに

重い規則破ってんのさ!!」

『ふふ、アキ君入学してすぐボタン掛け間違えてすぐに目立った人がそれ言える?』

「う、僕の黒歴史の1つをそんな簡単に掘り出さないでよ」

『ごめんごめん』

「いいよどうせ僕は、朝食すぐに先輩の頭に味噌汁ぶっかけて騒ぎ起こしてそうだよ
どーせ」

『ぶ、ふふふ本当に… してそうでごめ』

「おおい、そこはフォローしてよ。そんな事ないよとかそこまではさすがにとか言つて
よー」

まだ自虐しすぎってひかれた方がマシだよこれなら。

『そ… そこまではさすが…』

「ハル、声を抑えていても今笑ってるのわかってるんだからね」

『まあ、それは置いておいて』

「僕の扱られた過去の傷はそのまま放置ですか」

僕の心の傷は誰も絆創膏を貼ってくれないというのがよくわかった。

『向いてるって言ったのは私が実際助けられたから』

「それって今日のこと?」

『ううん、今日もあるけど大規模侵攻の時の事。私がお父さんとお母さんと離れ離れになつていた時、アキ君が来てくれたあの時』

「あ、あれは前にも言ったじゃないか、僕も迷子になつてたまたまハルがいたから。だからたまたま助けたんだよ」

「嘘、あの後おぼさんに聞いたよ。アキ君私がいなくて知つたあといつの間にか避難所からいなくなつてた」

「うっ」

『一々隠さないでいいのになんで嘘で誤魔化すかの？』

「だつて恥ずかしいじゃない、それにこういうのつて言わない方が格好いいつていうか…」

ほら、よく言う言わぬがバナナつてあれだよ。

あれなんか違うな？

『ふくん。でも確かに格好よかつたよ』

「え？」

『私がこの話をおぼさんに聞いた時すぐくときめいた。私が君の事を意識したのはやっぱりあの時からかな』

「ハルは結構大胆に言つてくるね」

『アキ君が鈍感だからね。間接的にアピールしても気がついてくれないのはよく知ってる』

「カンセツテキ？」

『アキ君明日お勉強ね』

「何故に!？」

『でも、アキ君今日言つてたよね私の事が大好きつて』

う、確かに僕も今思えばあんなところで告白するなんてしかも近くに子供だつていたのに、思い返すだけで悶えてしまいそうになる。

あれ？確か僕が言つたのは確か

「あれ、確か好きだよつて言つたはず」

『だ・い・す・きだつたよ』

おっと、多分これはハルの地雷を踏んでしまったな。

「そうだね、はいそうでした」

『それで、そのこれからは交際つて事でいいのかな？』

「あ、その事なんだけど」

『何？まさか取り消すつて』

「違う違う！取り消すとかじゃないよ、今日のは本当の僕の気持ちだから」

『…そう、ありがとうございます』

「え、どういたしまして？」

あれ、何でお礼言われたんだ？

『それで、じゃあ何があるの？』

「僕、ボーダーに入つてボーダー推薦を狙う。それからハルが第一志望にしている高校を受験する」

『え？アキ君がどこ志望してるか知ってるの？』

「六？館でしょ、前に話してくれたじゃん」

『そういう意味じゃなくて、アキ君じゃ学力的に無理だよ？』

「うっ、雄二にも言われた。そりゃ僕が馬鹿なのは知ってるよけど、でもそこはボーダー推薦で」

『いくら推薦があつても学力が全くなかつたら受からないよ』

「わかつてる、ハルが言つてることは全部正しい。でもそれぐらいしないと駄目…なんだ」

『だめ？なにが』

「君の彼氏になるなら、僕は僕自身胸を張つて隣に立てるようにならないとそれが僕が今までわがままに生きてきて、それでもわがままを言うんだから、それぐらいししないと

僕は僕を認めることができないんだ」

『はあ、推薦を受けるなら正隊員にならないと行けないんだよ?』

「わかつてる」

『訓練の片手間にアキ君勉強も疎かにしちゃだめ何だよ?』

「・・・ わかつてるよハル」

『アキ君自分で勉強できる? 自分でわからない所を理解しようとする事が出来る。というよりアキ君一人で考えてたら頭ショートしてそうだけど』

「がはっ!あのハルさん」

そうですね、まさにそれは現実には起きるであろう。

『何かなアキ君』

「僕に勉強を教えて下さい、というより勉強見てください」

『ぷ!何それさつきまで格好つけてたのに。そこは意地張つそんな事ないよ自分でやるもんつて言う所じゃないの?』

「いいんだよ素直で自分の事をよくわかつてるのは僕的美徳なんだから」

『わかった、ただし条件がある』

「条件?」

『絶対弱音を言わないこと』

「はい」

『それと、もう学校で問題起こさないように』

「2つ目！」

『文句ある？受かりたいんでしょ、そして最後に』

僕は唾を飲んでハルが出す最後の条件が何なのか構える

『絶対、合格すること』

「・・・わかったよ」

『約束ね』

「うん、約束する」

この時僕はふと左手の小指を立てていた。

この条件はハルの願いだってわかったから、絶対叶えてあげないといけないそんな義務感が生まれていた。

『なら、引き受ける』

「ありがとう」

『ちなみにアキ君』

「何改まって？」

『ボーダー試験の申し込みそろそろ締め切られちゃうよ』

「え!?!嘘早くしないと」

『じゃあ、アキ君おやすみなさい』

「え? あ、おやすみ」

僕は電話を切りすぐさまボーダーのホームページにアクセスして申し込んだのだった。

私は、さつきまで彼とつながっていた電話を抱きしめた。

さつきまで愛おしい彼の声が耳元で囁かれるあの感覚が何となくこそばゆくて、でも終わってしまった今では物足りなさど寂しさが私の中で渦巻いている。そんな気持ちでこの電話に残っている熱でとかさうもしているのかもしれない。

そしてふと自分の小指を見る。あの一瞬私はアキ君と指切りをしていた気がしていた。多分アキ君も約束って言うてくれたから指を立てていた気がしたんだろう。

全く格好つけてたくせに、最後の方は完全にいつもの状態だったじゃん。腰が低くて自分の意思も基本的には他人に譲りがちな所は本当に男の子としてならどうかと思うあの可愛らしさ、でもその全てが……

「……がんこ者」

そう呟いて私は今開いている参考書を閉じて、違う参考書をノートにまとめ始めた。

第四話

「という訳で試験対策手伝ってください雄二様」

僕は次の日すぐ雄二に頭を下げ、ボーダーの試験対策をご教授してもらうため頭を下げに行った。

「一日でえらく心変わりをしたな。昨日はあんなにしよげてたくせに」

「いや、やはり諦めるって何か僕には似合わないから。希望を信じて努力をし続けようみたい」

「くだらねえ事言ってるじゃねえ、何が知りたいんだよ」

「ボーダーのテストで上手くカンニングできる方法」

何故か一瞬空気が固まったような気がした。

そして次の瞬間

「アホかあ！できるわけねえだろ」

僕の純粋な質問に対して雄二は叫び声と同時に僕の頭にチョップを振り下ろしてきた。しかも狙ったかのようにちょうどこの前の喧嘩でコブができていて治りきつてない所にクリーンヒットさせやがった。

「いたああ、雄二貴様これから酷使させないといけない僕の頭に何するのさ」

「酷使させるつもりねえだろ、思いつきあ休ませる気満々じゃねえか」

「で、ないの」

「ある訳ねえだろ」

「え!?!じゃあ雄二はどうやって受かったんだよ」

あの筋肉ゴリラであり、僕と同じくらい先生から目をつけられているあの雄二が、カニンングを使わないでクリアできるはずがない。

「お前・・・お前とはいっつか本気で決着をつけねえとな」

「じゃあ真面目にやるよ」

「お?・やけに素直だな」

先ほどとは打って変わって、真面目に勉強すると言った僕に大して雄二はキョトンとした表情をしていた。

「ま、色々あつてね」

ふと、昨日の事が頭をよぎった。

自分の目標、そしてひたむきに努力しようとした昨日の自分。すぐく恥ずかしいと思うけれどそれと同じくらい昨日があつて良かったなと思う所がある。

昨日の決意は嘘ではない。それを僕はこれから証明するんだ。

「そうかい、ボーダーの筆記は学校の実力テストみたいなものだ。それは俺が見てやるよ」

「本当に？」

「ああ、てめえひとりじゃ時間の無駄だろうから貸しにしといてやる」

「助かるよ雄二」

「おう」

そんな訳で、僕は放課後雄二の防衛任務がない時はボーダー試験の対策をすることになった。

やる試験は筆記と体力測定そして簡単な面談らしい。体力測定は自信がある、ここは雄二も大丈夫だと言ってくれた。

僕にとって難関である筆記試験の内容は、雄二が言うには簡単らしいのでだいたい出てくる範囲を教えてもらい、雄二が自習に使ったノートを見せてもらった。

何これアラビア語？

「おい明久よ」

「な、なんだい雄二」

「目がバシャバシャ泳いでるがまさか」

「ふ、全くわからない」

僕は悟った。

さすがはボーダー中途半端な隊員は要らないと、すごく勉強ができてすごい運動神経のまさに神に愛されてると思えるぐらいの素質の持ち主しかいらないうい訳だな。

「何だろうな、お前を見てるとこのクソ簡単な試験でも必要なんだなって思ってる」

「ぐはっ!？」

雄二の言葉は僕の心に矢のように突き刺さる。

何か最近僕精神的な攻撃が何度も来てるような気がするんだけど、気のせい？絶対気のせいじゃないよ!!

「こりゃーから教えなさねえとな」

「ええー!」

「こつちが言いたいわ!」

そんなこんなで僕と雄二の放課後の勉強会が行われた。雄二は一日最低3科目を同時平行に教えて、それを1時間に詰め込んだ授業をしてくる。

おかげで僕の頭はぱんぱんだよ、今もふと公式が口から飛び出てきそうだ。

そしてそれが終わり下校していると今度は

「アキ君!」

家ではハルの授業が始まる。ハルの授業は、癒しという点では雄二の10倍マシなん

だけど厳しきは雄二よりも厳しい。しかも家が近いし僕はハルの親とも悪い仲じゃない、そのため少し遅くても送っていけば笑って出迎えてくれるので結構夜遅くまでハルは勉強に付き合ってくれる。

因みにこれは平日毎日のスケジュールである。

休日はもつとハードなスケジュールだ。

ハルと雄二は相談しあって休日は防衛任務がない場合は10時から15時まで雄二が僕の授業を担当して、そこから30分後にハルの授業が行われる。因みにハルと雄二の入れ替わるこの間の30分、この30分だけが僕の休日の休み時間なのだ、ハルが帰っても課題と言われた問題を渡されそれを次の日までやってこないといけない、ハルならその問題はすぐに終わるらしいが僕は教科書とにらめっこしてやっと解けるぐらいなので、結果終わる頃には僕は爆睡していた。

基本これが毎週続き、ボーダー試験1週間前になると面接練習をハルが僕の家ですてくれ始めた。

「吉井明久君貴方の長所を教えてください」

「長所：．．えつとえつとあ！真面目な所」

「アウト」

ハルは自分の右と左の人差し指を交差して駄目というサインを示した。

「え、駄目？」

「入試でも入隊試験でもそれはだめだね」

何で？真面目な人つてもしかしてお呼びじゃないの？

「入試だったら学校からの内申書でアキ君があんなに問題起こしているのに真面目なんて言っても信じて貰えると思う？」

確かにそれはあるかも、痛いところついてくるな。

「ボーダーでも真面目な所はもう前提条件みたいなものだし真面目よりも一歩先の答えを望んでいるはずだよ」

真面目よりも一歩先の答えか、何だろう。言われると全然わからない自分のいいところだよ？

ああこんがらがってきて頭が痒くなってきた！

でも頭を掻きながら何とか考えるのをやめないで考え続けた。

僕のいい所、軽口ならいくらでも自分をほめているんだけど考えついてもそれを否定してしまうそのループが頭を埋め作りてきている。

「アキ君はコミュニケーション能力が高いね」

僕が苦心して考えているとふとハルはそういった。

「ハル？急にどうしたの」

「自分の長所ってわかりにくいから、そういう時は身近な人に聞けばいいんだよアキ君、アキ君ってクラス替えすぐとかまだ馴染めない人がいたりしたら積極的に話し始めて輪を作るのが上手だよ」

「えへ、なんか照れるな。ハルにそんなこと言われるとは思ってなかったよありがとうハル」

本当にハルはよく回りを見ているね

「お礼はいいよアキ君、でもその代わりに私の長所も教えて欲しいな」

「ハルの長所？」
「うん」

長所か僕は首をひねり改めて考え出す。

そうだな、こういう時ってどういうんだろ勉強が凄いかかさっきの真面目とかハルなら当てはまるけど、それじゃ薄っぺらすぎる気がするな。

ならやつぱりもう少し深いものとか、例えば芸術系の実技は低いけれど、その過程の努力や授業態度なんかでカバーしているとかが具体性を言えばいいのかな？

僕は改めてハルを見た。いやこういうのは、シンプルな方がいいような気がした。

「うーんと、そうだなやつぱり優しい所かな！今の僕の勉強に付き合ってくれてるのもそうだけど、ハルってさ学校の花壇に水をよくあげたりもしてるし、少し危なかしいけ

どいじめの仲裁とかしてたし。ハルには色んな魅力があるけどどれが一番かって聞かれたらやっぱり昔からそこ変わってないし僕は優しさが一番の長所だと思うよ！」

長い時間見て、一緒にいて感じた事を僕はそのまま伝えることにした。

「……そっかありがとうねアキ君……さあ続きをしよう」

など、こんな事が何度もあつたりして、ボーダー入隊試験はあつという間に当日を迎えた。

僕は受験票と筆箱が鞆にあることを確認し、そして動きやすい服とか水筒等もカバンに詰めて家を出て試験に望んだ。

まず最初にマーク式の学力テストが始まった。

何とかハルと雄二のおかげで問題は解けてる、多分僕一人だったらだいたいぶ躓いていただろうけどあの二人に感謝だな後は……

(やばい時間が足りない……こうなったら)

僕には最終兵器がある。しかもこのような選択問題なら絶対的な信頼を持てる最終兵器が、あと時間は残り12分見直すのも含めたらあと最低5分は欲しい。

迷ってる場合じゃないな！

そして次の試験は体力テスト、これは雄二が言ったように基礎体力を測るだけのシン

ブルなテストだった。学力テストこれに自信が無い僕はこのテストでどれだけいい評価を貰えるかが合否に大きな影響を与える！

「うおおおおお！」

そして最後に面談、試験官は一人一体一での面談だった。

「そうですね、明久君君の長所を教えてくださいませんか？」

「はい！ぼ、僕の長所はコミュニケーション能力です。自分で積極的に話しかけますし、中学でもすぐ友達を作っています。」

はあ、本番の面談はどの試験内容よりも緊張するな。

試験官ずつとこつちみてるし、後なんか撮られてるみたいな感じもして居心地が悪かった。

さて、試験も終わり後は合格発表を待つだけだ。僕の番号は55番発表まで気が気じゃない。

ボーダーの試験が終わっても受験はまだ控えているので、雄二の授業は終わったがハルにはまだ教えて貰っていた。ただその時何度かそわそわしているのを注意されるが、やはり気になるものは気になるんだ自分が初めて本気で取り組んだことだから僕としては合格して欲しいと思うけど、落ちてるかもって不安になる時もあるからどうしてもそわそわしてしまうんだな。

「そうだ、ここまできたらどう足掻いても引き返せないんだ。腹を括ろうそして大きな深呼吸をして全身の強ばりをほぐそ」「はい、合格発表です」

「55番!!」

僕はすぐさま飛び出して、誰よりも早く自分の番号を探す。えつと

1

2

5

・

・

・

・

・

・

4

5

5

5

4

3

0

5

「55番： あったー」

僕の不安はすぐに吹き飛び、無意識にガツツポーズをする程嬉しくしていた。そしてそのまま一人でわーいわーいと叫び倒すぐらい喜んだ。

凄いな努力って報われるもんだね、そして報われた時こんなに嬉しいなんて、あ、そうだと忘れるところだった僕はメールでハル達に合格していたよって伝えとかないと。

「よし、何とか第一関門突破」

「番号があつた方はこちらに集まってください」

おつと呼ばれた。何だろう今後の予定とかかな早めにハルに教えて今後の予定を組んでもらわないと

そしてその後僕達は何グループにわけられグループ事に部屋に入る。

入ると面接してくれた人がいて、合格者は用意された椅子に座るように促される。

僕もそうだけど合格者は皆そわそわしており、期待に目を輝かせて担当者のお話を聞く。

「皆さん合格者おめでとうございませう、皆さんは本日をもってボーダー隊員となります。今後はボーダーの一人として自覚を持って行動し街を守るよう尽力を尽くしてください」

「はい」

よし、後はこれで早く正隊員になってボーダー推薦を使えるように……

「さて、最後に皆さんはまだ学生です。ですので親御さんの名前を書いたこの契約書を次回の訓練までに持つてきてください」

はい、終わりました！

side 帰路

帰り道、話はすぐに終わり午後には帰る事ができた。まだ日は頭の上に登っており、すれ違う人は日曜日ということで家族連れや友達同士ばかりで僕はそんな中肩を落としながら通り抜けていく。

そして僕は、先程ボーダーで貰った書類を見て大きいため息を吐く。

「合格はすることができたけどまさか、親の同意が必要とか」

僕は今一人暮らしをしている。親の仕事場はとも離れていてそつちに家を持っており、たった一人の姉は留学中なのであの家は僕一人で住んでいる。

別に両親との不仲とかはない、親は仕事の転勤みたいなもので行ったのだが僕が無理を言つてここに残させてもらっている。

でも、うちの家庭ヒエラルキーは一番トップに母で次に姉、その次に父最後に僕であり、僕と父に優劣は全くなく完全に女の方に発言権が備わつて僕らが上に行くことは無い。そんな女尊男家庭で僕がやりたいって言つても絶対に通るわけが無い。

「完全無理だよな、僕がボーダーに入りたいなんて言っても母さんいいなんて言ってくれないよな」

そもそも家にいないし僕が話あるから帰ってきて言っても帰ってこなさそうだしな。

最悪ハンコを適当に押し筆跡を誤魔化して持っていくか。そんなことを考えていると既に家に着いており僕は鍵を解錠するのだが…

「…あれ？ 鍵がかかってない」

もしかしてかけ忘れたのかな？

今度はドアノブを捻り玄関入ろうとするとそこには

「あら、おかえり」

とりあえず僕はすぐドアを閉めた。

「嘘なんで」

間違えない、あれはまごうと事なきうちの母だ。

あれ、今日帰るなんて言ってたか？

不味い部屋とか見られて僕の秘蔵コレクション見つかったりしてないだろうか…

「何してるの、早く入りなさい不審者に間違われるわよ」

「やあ、母さん今日帰るなんて言ってたっけ？」

「少し物を取りに来ただけよ、すぐ戻るわ」

そう言つて母さんはリビングに消えていった。僕は荷物を自分の部屋に置いてから一度リビング覗く。母はもう荷物をまとめており、後一時間もしないで出ていきそうだった。

僕は、そんなお母さんの背中を見てると焦り手に力が入る。

今切り出さないと多分母さんに言えずじまいでずるずるといつてしまひそうだ。だがどうしても許可してくれる未来が見えない。

でも、一度やるつて決めたんだ。僕は息をぐくりと飲み込んでから母さんに呼びかける

「母さん」

「何?」

「少し、話し良いかな」

「… お茶」

「はい?」

「お茶が飲みたいわ、できれば紅茶が欲しい」

「… わかった」

僕ははお茶を用意すべくキッチンに向かおうとしたのだが急に母に腕を握られ、母の

方を見ると

「……」

無言でこちらにメイド服を向ける母がいた。

紅茶は最近ハルがよく来るので買っていたのでそれを使うことにした。よかつたよ多分ハルように買ってないと紅茶なんて絶対この家にはないからね、僕と母さんは紅茶が用意されたテーブルに向かい合うように座る。

無言で紅茶を飲む母さん。

メイド服を着て俯く僕。

だつて仕方ないじゃん！少しでも機嫌とらないといけないんだから！！

「それで、母さん話つてというのは」

パシヤリ

話そうとした矢先にシヤッター音がする。

ちよつと息子の黒歴史何撮つてるの!?!しかもそれ最近全く見なくなつたすぐに写真が印刷できるカメラじゃん

「それで、話つて?」

この流れで話すの?僕結構重要な事話そうつて思つてたんだけど、何でこんな話がしにくい流れを作るのかな僕の母さんは

「…ボーダーに入りたいんだ」

僕はすつと母さんの前に入隊志願書を出す。

「少し前から興味を持って、この前試験で今日合格だつて言われた」

掠れる声で僕は母さんにありのままを伝える。

母さんは入隊志願書を手に取りじつと僕の話を聞くだけで特に何も言つて来なかつが一通り見終わったのか志願書を置いて話しかけてきた。

「ふうん、試験に受かったのよく頑張つたわね」

「じゃ、じゃあ」

「ダメよ」

僕の母さんはそんなに甘くなかつた。

けつ努力を認め結果も残せたのに、母さんは首を縦に振つてくれず即拒否された。

「え？」

「どうせ、興味持つたつて言うのはお給料のところでしょ？貴方ゲームとか好きだもんね。前帰つてきたときより数が減つてるのはお金に困つたからでしょ」

「ち、違うよ！給料とかゲームとかそんな理由で…」

違う、お金じゃないよ母さん。

「じゃあ何？」

「…それは」

「別に、働きたいなら高校からでもいいでしょ。年齢が達していて学校がOKしてるならそれなら私は反対しないわ。もちろん学業優先してくれたらの話だけど」

進学、ここをつかれると痛い、母さんも僕の成績の事はあらかた知っている。成績表は常に写真で送っているし、実は母さんとハルは仲がいい昔から一緒に遊んでいたものもあるがハル自身しつかりとした人なので母さんはそういう人は割と気に入るらしい。だからそのつながりから最近の僕の目に余る行動も筒抜けだろう。

仕方ない少し嘘を混ぜ込むのは悪い気もするが、僕が興味をもつて母さんにも通じるだろうしこの手でいこう。

「ボーダーに入ったらボーダー推薦って言うのがあつて高校受験有利になるんだ」

「なに？まさかそれが理由？」

僕は黙って頷く。嘘は言っていないんだ。

これならどうだ。

「はあ、高校受験を考えてるといふのは成長したわね。でもねわざわざボーダーに入るのには許可できない」

「な、何で」

「ここまで頑なに反対すると僕は逆に何で反対するのかわからなくなった。僕に信

用がないから？勉強もろくにせず先生に怒られてばかりで、三者面談とかでもあまり先生にいい顔されないうらい評価が低いから僕は信用されてないのか。

「母さんは何でそんなに反対するんだよ。母さんは僕を信用してないの！」

いつの間にか僕は声を荒らげて、立ち上がり机を叩いていた。

けど母さんはそんな僕を見ても顔色ひとつ変えずに話し始める。

「違う」

「違う？」

だったら何が違うんだよ。お願いだから少しは信じてよ、すごく努力をして試験を受けて合格したんだ。努力するのはとても苦しかったし、試験が終わったあととはすごく不安だった。今日まで落ちてるか落ちてないかドキドキしていた。動機は褒められた物じゃないが、心がこんなに揺れ動いて受かった時のあの喜びは嘘じゃない、ちゃんと本気だったんだ。僕だって本気になれたのに母さんは信じてくれないの

「真面目とか不真面目とかそんなの関係ない。ネイバーと戦うことに親が許可するかも？」

「!?」

「自分の子が危ないことをしようとしてるのにそれをとめないと思ってるの？」
え。

僕はこの時頭の中が真っ白になってしまふ。考えていたことや、先程までの信じて貰えない焦燥感は砂のように崩れ落ちた。

この時母さんは無表情だったがすごく怒っているのはすぐにわかった。だからこそ僕は言葉が出なかった。純粹な心配をしていたのだ。

「人生を大きく左右する高校受験を真剣に考えるのはいい事よ？でもその人生そのものが失ってしまう可能性がある選択なんて私は賛成できないわ」

「…」

違ふかった、母さんが僕を信じてないんじゃない。僕が母さんを信じきれていなかったんだ。

「話はそれだけ？私はもう行くわ高校受験頑張りなさい」

「言ってくれた」

僕はぼそりと言葉が零れ落ちたように呟いていた。

「なに？」

「ボーダーに入ってから後悔しないって言ってくれた人がいたんだ。その人は僕はボーダーに向いてるって言ってくれた！何でかわかんないけどその人の言葉は信じられて、ボーダーに入ったら今までとちよつと変わる気がするんだ」

この言葉は僕の自信の糧となっている。

褒められた事じゃない、とても危険な事だった、自分の命を大切にしろ。多分あの時説教されたならこういつた事を言われただろう。

でもあの人は敢えて僕にこう言ってくれた。

自分も生き延び守りたいものを守れた最高の結果を誇れと、だから僕はあの時のことは正しかったとそしてあの人は迅さんは言ってくれたんだボーダーに入って僕は後悔しない保証すると、その言葉を胸に僕は母さんが折れるまでお願いする。

「…3年前の大規模侵攻覚えてる？」

この街に住んでいた人は誰もが忘れないであろうあの大事件。あの事件は多くの人生をめちゃくちゃになるほどの傷跡を残して終わった大事件、僕もよく覚えている。

少し記憶を探ればあの光景が脳裏によぎる。突如開いたゲート、わんさか溢れるネイバー達が街を蹂躪していく光景、建物は壊れ街は悲鳴と逃げ惑う人達の恐怖に吞まれていた。

僕は戦争を見たことないからよくわからないけど、あれは戦争よりもひどいと今でも思っている。

「え、うん」

「貴方あの時、遙ちゃん探しに飛び出していったでしょ」

「…うん」

「確かに、貴方なら性格上人を守る仕事は向いてるかもしれない。でも貴方はいつも自分よりも他人を助けるために動こうとする。しかも自分の命を軽く見てるようにそう思えるような。ね」

僕は母さんの言うことに納得してしまった。だって僕はそれしか人を助ける方法を知らないから。

適わないな、母が強いというのは本当の事なんだ。だって母親が一番子に愛を注いでるのだから、とても重たくそしてとても熱い愛情をそれを僕は感情としなかった。せずつに喚き散らして勝手に暴走していたんだ。

「…」

「もし、貴方が戦いで死んじゃったたら私達は悲しまないって思ってる？そんなわけないでしょ、お腹を痛めて必死に産んで今まで育ててきた子なのよ」

母さんは僕の頬をそっと撫でてくれた。優しい手つきでまるで赤ん坊を撫でるように優しく…。それは僕を見ていつかの日を思い出しているのだろう。僕の頭の中にはもうないが、多分母さんの記憶の中には鮮明にあるのだろう。

「お願いしますー！」

僕は土下座をする。

「僕は頭が悪いから母さんの心配をさせない方法とかすぐには思いつかないけど、その

代わりに約束する。絶対死なないし、絶対無茶もしないって約束するだからお願いします。僕をボーダーに入れてください」

母さんは真剣に答えてくれた。正直母さんがここまで思ってくれている何て思いもしなかったし、聞いててすごうれしかった。

でも僕はバカだからそんな母さんの不安をぬぐえるような言葉は出ないし、上手く気持ちを伝える事も難しい。だから僕は僕らしく真つすぐな行動で母さんにぶつかる。

「はあ、これでいい?」

そして母さんは溜息をはいて入隊志願書に名前を書いて僕の前においてくれた。

〈sideウラバナ〉

「こんにちはおばさん」

「遙ちゃん、呼んでくれてありがとう」

一昨日、私はこの子から電話を貰い今日家に戻れないか聞かれた。私は勿論無理だつて言ったのだが、この子は引かなくてなぜ私を戻そうとするか尋ねると

『アキ君から大事な話があると思うのでぜひその目で今のアキ君を見てください』

そう言われた。

全くそう言う大事なことは自分で言わずなぜ貴女が伝えるのかと思つたが、多分伝えないまま流す気でもあつたんだろう。明久はそういう事をしそうだし

「どうでしたアキ君との話し合いは」

「子供が真剣に選んだ選択よ、親が親が勝てるわけないじゃない」

あそこまで言つて折れない明久は初めて見た。それは成長を感じとても喜ばしい事でもあるが寂しくもあり、そんな背中を押してあげたいと思う親の性があつた。

「あの子がボーダーを口にしたのって貴女が原因なの？」

「そうですね、私もその一人です」

「貴方もその一人？つて事は他にもいるの？」

「たくさんいますね、でも決めたのはアキ君です」

「・・・そう、私はもう行くわ。これあげるから好きにしなさい」

「なんですかこれ・・・え！」

私は報酬替わりにさっきイタズラで撮つた写真を遙ちゃんに突きつける。

写真の内容を見た遙ちゃんは真つ赤になり写真から目を話さずじつと見ていた。

この子も色々変わったけどまだまだあの頃のままなのね。

「あの子の事お願いね」

「は、は、は」

可愛い子には旅をさせよ、親の元を離れて少し見ないだけであの子の顔つきは変わっていた。成長過程を見れないのは残念だけどあの子の成長は素直に嬉しく思う。

優秀な姉を持ったからこそあの子は自分はいつも下の存在と感じて自分の才能の限界を決めつける癖があり、あの子にはいつも自分からやるっていう主体性がなかった。そんなあの子が食い下がらないで頭を下げてまで自分の意思を貫こうとする。

時間は平等に流れている、でも時間は流れているだけ人を進化させないし退化もさせない。変化を与えるのはその人の心いと感じたり、悪いと判別したり嫌だとか楽しいとかたくさん刺激を受けて人は様々な変化する

「頑張りなさい」

そして、
いよいよ僕のボーダー生活の幕が上がる

第五話

「君たちの入隊を我々は歓迎する。君たちは今日からC級隊員つまり訓練生として入隊するのだが、三門市のそして人類の未来は君たちにかかっている。日々研鑽し正隊員を目指してくれ」

(いよいよだ、いよいよ始まるんだ)

遂に迎えたボーダー入隊式、僕達訓練生は白い隊服を身にまとい本部長である☒忍田真史さんの挨拶を聞き、辺りを見渡すと緊張している人もいれば、余裕なのか笑っている人もいた。友達同士なのか固まって話し込んでいる人達もいた。

僕、僕も当然緊張しているよ、昨日なんて眠れなかったしね。

でも今は不思議と落ち着いている。

〈 s a i d 今朝 〉

「ボーダーの初訓練今日からだだったよな」

「うん、授業終わったらそのまま行くつもり」

ボーダーは午後2時から今期の新入隊員全員集まつての合同訓練が開始される。

普通ならこういう場合ボーダーの訓練といえは早退が認められてラッキーなのだが、今日はたまたま保護者同伴の三者面談があるので授業は昼までで、僕は持つてきたお弁当を食べてからボーダーに行くつもりだ。

「そういやお前トリガー何にしたんだ」

「結構迷つたけどスコープオンにした、何か一番しつくりきたから」

簡単なトリガーの資料がこの前届いた。そしてその資料から一つメイントリガーを選択して封筒でボーダー本部に送る。そして今日本部で手渡しされるらしい。

僕も貰つた資料を読み込んでどれにするか考えたのだが弧月とスコープオンぐらいしかよくわからなかったためにその二つどちらかにしようかと思つたらスコープオンのどんなゲームにもなかつた性能にすごく興味を持った為にスコープオンを選んだ。

「妥当な判断だな。孤月より軽しい中々応用が効くからなあれは」

「そういや、雄二は何にしたの?」

「俺か?俺はハウンドだったな」

「ハウンドって確か追いかける弾のやつだっけ?」

「ああ、あれが一番結構手っ取り早かったからな」

雄二は銃の方を選んだのかやっぱり、銃系の方が強いのかな

「つて事は今も雄二は銃使ってるの？」

「訓練生の時はそうだったが今は射手だが」

「へえ、…あれ、射手って銃使う人のこと言うんじゃないの？」

「そこら辺はもう少しトリガーに詳しくなったら教えてやるよ」

「でもいいな、僕も一度使ってみたいよ」

「やめとけ、銃型メインにするのはチーム戦得意な人が多い、お前じゃあわんだろ」

「何言ってるのさ、仲間と練習して一緒に強くなる。ある意味僕好きなシチュだよ」

あくまで王道、苦難をともにして一緒に新たな技を生み出す。何とも最高の展開では

ないか多分今の週刊少年誌では全く売れないだろうけど。

「でもさ、改めて見たらトリガーって結構色々あるんだね、何かゲームの武器選択してる

みたいだったよ」

「まあ、ゲームをリアルにした戦いしてるからな」

「何かSAOみたいだ」

いや、どっちかというとならGGOか？銃があつて弧月は光剣みたいな剣だし

「命のかけ具合はあつちの方が何倍も上だな」

「そうなの？」

「ボーダーは組織としてしつかりしてるからな、危ない橋は不用意には渡らせてねえようにしてんのさ、前みたいな大規模侵攻があれば別だろうが」

「：： やっぱりまたあるのかな」

「あるな、絶対近くはねえだろうがそこまで遠くもない。だからボーダーはおおきくなつてきてるんだろう」

「覚悟はしとかないといけなかな」

ボーダーに入る時母さんを話し合った時の事を思い出す。母さんも多分そのことを予想していたから許可を渋つたのだろう。

母さんとの話し合いで僕も自分の事に関して改めてることができた。だから以前よりも大規模侵攻の事を大きくとらえてしまう。

「しとく分には損はねえがあんま緊張すんなよ。お前ガチガチになりやすいんだから」

「ふ、逆境は僕の望むところさ」

「お前の軽口は本当にうざいな」

「急な罵倒!?!」

僕と雄二は軽口を挟みながらボーダーの事を教えてもらっていたら後ろからハルが僕達の元にかけてきて僕たちの間に入ってくる。

「おはようアキ君、坂本君も」

「おう」

「おはようハル」

ハルがしてきた告白以降何かモヤモヤとした気持ちがあり、勉強している時は集中してるしハルも怖い感じでそういうのを気にさせてくれなかったが、普段の挨拶とか学校の下校とかも僕から避けるようにしていた。だけど僕も返事……というか決意みたいなのをハルに伝えてから何かスツとした気分となり、更に約束の条件を果たすためのボーダーに入ることがだいぶ気が楽になったのだろう。今では前以上に話しかけらるようになった。ははそら

「今日なんでしょアキ君の初訓練」

「そうだよ」

「それっていつから?」

「今日の2時からだよ」

「それなら授業終わってから結構時間あるよね?」

「まあね」

「ならば、今日途中までいつしよに帰らない?」

「え?」

普通なら僕はいいいののだが、今より少し前のことに僕はせっかく正隊員である雄二がいるなら中の訓練やボーダー内の施設なんかを教えてもらおうとたのんでいたのだ。

雄二も今日は19時から防衛任務があるがそれまではボーダーにいるつもりだったらしくいいと言ってくれたそのためついでだし一緒に行こうということになっていた。

さて、どうしようか雄二を捨てるかハルを選ぶか。

あれ選択一つしかない？

僕はチラリと雄二を見ると雄二は視線に気づいたのかこう切り出した。

「いいんじゃないか、俺は秀吉達と帰るからお前は綾辻について行ってやれよ」

「うん、そういうことなら一緒に帰るハル」

「ありがとアキ君」

それから僕たちは教室に入り1時間目を迎える。

最近僕は授業中に眠らなくなった。

うとうとしても気合で持ちこたえて何とか6時間過ぎす。

ハルと勉強するようになってから、僕はハルその日の科目一つについて10個以上するようになっている。それぐらいしないと僕は完全に理解できないし、一度寝てしまつてどこがわからないといったらすごい怒られた。

後たまに僕は真ん中から少し右に寄った席にすわっているのだけど、たまに僕より後ろ側に座っているハルから睨まれるので寝てしまった時なんて後で何と言われるか

そんなこんなで授業は終わり、僕とハルは一緒に教室を出て今ハルの家方面に歩いている。少し遠回りだけど、時間はあるしハルと話していると初訓練だという緊張が和らいでいるので助かる。

「初訓練緊張してる?」

「ふ、僕が緊張しているとしても?寧ろこれから刻む僕の英雄譚の幕が上がることにうずうずしていいいいいいいい」

「手汗がすごいよアキ君」

急に僕の手を握ってきたので驚いて変な声を出してしまった。

あつたか、柔らか、あれ今手汗って

「とおおとおおごめん汚いよね待っててすぐに拭くから!」

僕は慌てて自分の制服で手から火がつくぐらいの勢いで拭いた。

なぜつないで確認するの普通人の手汗何て嫌でしょ!?

「ははは、いい反応するよねアキ君って」

「こういうのは驚くからやめてよね?」

「うゝん?ドキドキするからじゃないの」

う、言葉に詰まる。

ただの友達の時ならまだしてなかった（はず）異性としての意識、やはり改めて綾辻遙を見るとやはり美少女だ。艶やかな髪に整った小さい顔、同年代の他の女子と見比べるとスタイルも頭一つ抜けていい。

それにさつき僕の手を握ったとき、僕が驚いたのを見るとしたいたずらっ子のような笑顔もすごく魅力的だった。

そんな女の子に僕みたいな思春期真っ只中のモテない男なんかじゃ太刀打ちできるわけないじゃないか

「ん?」

「?」

「手、つないでくれないの?」

「!?!」

僕の前に差し延ばされる手、その手に僕の意識は全て向かってしまいつなごうとする手に力がこもる。

「いや、あのそういうのはまだ早いっていうか」

わかるよ、どうせヘタレとか思うんだろ。

回りの人たちみんな僕の事チキンって思っているのわかるよコンチクショ

「何が早いのに、私達好きあつてゐるんだよ」

「いや、でも」

「私は今すぐにつなぎたいな」

ハルは上目遣いでおねだりをしてくる。

今思つただけで、女子の上目遣いつて威力が半端ないよねある意味兵器だよ。何かの条約で取り扱いに制限かけないと世の中の草食男子達は皆焼け死んじやう。

「わかつたよ、アキ君がそんなに嫌なら」

差し伸べた手を引つ込めようとするハル。

わかつたよ、いいよ手をつなぐ位なんぼのもんじやい。

そういつて僕も手を伸ばす。因みに客観的に見るとハルが引つ込めようとする手より僕が延ばして掴もうとする手の方が遅かつたりする。

「う、うう」

そしてやつとこさ僕の手が伸び切つたとき、僕が反応できないぐらい早く春の手が僕の腕を引つ張つた。

「うわ!?!」

「ふふ」

そしてそのままハルは僕の腕を絡み腕組みをしてきた。

そうするとハルの体のあの部分が僕の肘に当たってその感触が服越しに伝わってくる。

（やわ、だれのどこか完全に言ってしまうば多分僕の社会的身分が不安手になってしまうので断言はしないがでも柔らかすぎる!?!）

「ちよ!?!ハル流石にこれは」

「全く、アキ君は奥手すぎ」

だつてそれは単純に恥ずかしいし、こんなやれるわけないよ。まだ僕達付き合っているわけじゃないからね。

「アキ君が思っている以上に私は嬉しかったんだよ。」

「な、何が」

「改めてボーダー入隊おめでと、頑張ったアキ君にご褒美」

そういうとハルは密着度をあげてくる。

「ハル、当たって」

「当ててるんだよ、アキ君は頑張った。そして今度はもつと頑張らないといけない、はい」

「いた!?!」

甘い空気を醸し出していたハルは、僕の腕から離れて背中を強く叩かれた。

「はい、甘い時間は終わり気を引き締めて頑張ってきてね！」

「どうやらこの平手打ちはきつつけらしい。多分これ背中にもみじできてるな、大分強く叩かれたから」

「じゃ、ここままでいいよ。坂本君待っているんでしょ」

「ハルはそのまま、小走りでかけながら大きく手を振って自分の家の方に向かっていった。」

さて、ハルに気合入れてもらったしそろそろボーダーに向かうか。

つとその前に、雄二に電話しよ合流しないとイケないし。

「もしもし雄二」

『明久か、彼女とのデートはもういいのか？』

「ふ、甘美な時間を味わっていた所だよ」

『お前が顔赤くしてんのはわかってるからな』

僕の眉がピクピク動いている。

雄二の言う通り僕の顔は凄く熱い、多分真っ赤だろう。

「そんなことより、今ボーダーに向かっているよ雄二は？」

『マクド、昼めし食ってんだよ秀吉達と』

「なら、僕もそっち行こうか？」

『いや、もうそろそろ解散するところだったから俺もボーダー行くわ』

「OK、んじゃ後で」

「おう」

さて浮ついた気持ちはこれで終わり、切り替えていきますか。

↳ said 現在↳

ハルにいい一発をもらったから、今はそこまで緊張していない。寧ろ気合が入り過ぎてこまっっているぐらいだ。

今は訓練生の引率を担当している嵐山隊が訓練室に案内してくれている。

因みに今は最後尾で一緒にいる雄二と話している。

嵐山さんの説明によると、正隊員になるにはこの手に書かれている数字を4000にすればいいらしい。

僕の今のポイントは1000、後3000集めればいい。ポイントを貰える方法は2つある。

今回はその1つ合同訓練でいい評価を貰うこと。

合同訓練は週に2回ある、一応僕はこれには毎回参加する予定である。

その授業の事は上乘せで勉強するよと笑顔で言ってきたのが怖かったけど。

「そーいや、初めての訓練ってなにをするの？」

「ん？俺ん時は戦闘だったな〜」

「えーいきなり」

「皆そーいう反応してたわ」

そりゃあそーうでしょ、聞いてないよ今日貰ったトリガーまだ使ってなんだよ。

トリオン体になったのだから今が初めて何だよ、それなのにすぐに戦闘訓練って

「ま、それでもやれるやつはできる。氣い引き締めていけや」

そして僕達は大きな部屋に案内された。

中はシンプルに観戦するためのスタジアム並みに大きく座れるスペースが用意されてお、目の前には闘技場の様な台が設置されていた。

これから何をするのかそれは嵐山隊長の嵐山准さんが説明してくれる。

「さて、ここは仮想訓練室だ。ボーダーが得た情報でくみ上げたネイバーを相手に対ネイバー訓練を行う」

「やつぱ、この訓練か。おいあきひ、さ!？」

「な、なにさゆうじ。ぼ」

「説明だけでシヨートしてんじゃねえよ。さつき何するか教えたる取り合えず嵐山さん

の説明は置いていて、ネイバーを倒してこいってことだよ」

「なるほど、そういうことか!」

「不安だ」

この訓練のルールは、5分以内にあのアンキロサウルスみたいなネイバーを倒すこと、って雄二が言ってくれた。

皆大体3分前後、さっきの人はぎりぎり2分を切れなかった。

「雄二は、何分だったの?」

「俺か、だいたい十秒ちよいだったな」

「速!?!」

「まあ、俺はトリオンが高いから無理やり押し込んだ」

「トリ、」

「その説明は今度してやる、っ!?!」

「どうしたの?」

雄二が今入っている訓練生を見て険しい表情をした。

今の子、女の子だねしかも結構可愛いというよりも華憐って感じの女の子だ。

ってこの子凄いい、他の子とは一線を引く戦い方だ。

何か余裕がある感じがする、しかも弾のキレもえぐいときた。

「今の子凄いなね30秒切ったよ」

他の人たちも驚いていた。

流石にあんなおとなしそうな子が一番トップのタイムを出すとは

「ああ、しかも

あいつは」

「うん？」

「いやいまはいい……って次お前だろ」

「あ、そうだった」

そして次は僕の番だった。

ああ、あの子の後はやりにくいな。

妙にみんな浮き足立ってるし、釣られてなんかソワソワしてくる。

「おいアドバイスをやるよ」

「アドバイス？」

「ゲームだと思え」

「は？」

「お前ならそう思った方がやりやすい」

僕は雄二のよくわからないアドバイスを受け取り訓練室に入った。

（side 坂本）

「坂本」

「柿崎さん」

柿崎国治、嵐山隊所属でフレンドリーな性格なの為、癖のある性格の人も彼には心を開いており以前ボーダーのイベントで少し有名人になった人だ。

「意外だなお前が来るとは思わなかったぜ」

「柿崎さん達は面倒そうっすね毎回毎回嵐山さん達つすよねよくやる」

新しいC級隊員の初訓練の面倒はいつも嵐山隊がやっているらしい。

俺の時も嵐山さんがやっていた。

「そこまで大変じゃないぞ、嵐山も充も不満は言っていないし新しい奴は見てると新鮮で面白い」

「流石っすね」

流石ボーダーのお人よしが集まった部隊嵐山隊、柿崎さんも嵐山さんも本当に人が良く俺みたいな奴でも気さくに話しかけられる。

「さっきの子知り合いなのか」

「はい、腐れ縁ですが」

「なるほどな、お前もしかしてあの子と組むのか？」

「どうでしょうね、合格基準より上なら組もうと思つてますが」

「基準つてお前の基準つてすげえ高いだろ」

「そうつすか？」

「だつてお前二宮さんの誘い断つたんだろ？有名だぜ」

「ああ、やつぱ知られてるんすね」

「最近じゃこれが一番の話題だからな、太刀川さんやお前と同年代の三輪も驚いてたよ。」

「お前もなんで断つたんだよ、お前にとつても悪い話じゃないだろ」

「ま、俺にも色々あつたんす」

おつとそろそろ始まるみたいだ

〈 s i d e 明久 〉

『訓練開始』

現れたネイバー、そーいや前にネイバーと戦つたこともあつたけ。

その時は何も出来ずにただ逃げ回つただけだけど、今はトリガーがある。このトリガーでどこまで違うのか

「やっ」

僕は、ネイバーよりも先に動き出す。

(スコープピオン)

そして僕のトリガーのメインウエポンであるスコープピオンを起動する。すると何もなかった僕の右手に刃が収められていた。

これがネイバーに攻撃することが出来る武器なのか、トリオン体の操作は普段の体が操作するのと変わらないって言うてたけど、確かに違和感ない。武器もすぐに出すことが出来た。

「あの、ネイバー蜘蛛みたいなあいつより断然遅いなら」

動き一つ一つは鈍く、僕を吹っ飛ばしたネイバーのそ方がもつと早かったし恐ろしかった。あれに比べて遅いなら

踏みつけようとするネイバーの攻撃を躲して、僕はネイバーの背中に乗る。

ここなら攻撃も来ないはず。

「いけええー！」

そしてそのままスコープピオンで斬りつけるのだが、切れ目どころか傷すら全く残っていない。

この皮膚鉄板でも突っ込んでるのかと思うぐらい硬い。

「硬い」

硬さは多分あの時のネイバーと同じぐらい、実際突進されてすごく硬かったのは覚えて
いる。

「おおっと」

そのままもう一度斬りつけようとしたら、僕は振り落とされてしまった。

「何だこれ？まるでモン○ンみた…い」

待てよ、確かに雄二がそんなこと言ってたな。確かゲームと思えとか何とか…

そうか、確かにこれはモン○ンみたいだ。スコーピオンでできない部分があっても、
他なら刃が通るところがあるかもしれない。

よしまずは

「うわあー！」

と考えていたら攻撃されてしまった。

僕はさっきの人の訓練を見てたから、どこ狙えばいいか大体わかった。

さっきの人は重点的に目を狙っていた。

多分こいつらは白い所が固いところなんだ。

どうしようか、目を狙うかや目だったらビーム飛んできそうだし

「ならやる事は」

先は上に乗ったがあ今度は下からだ。

僕は足を上げているネイバーの下に潜り込み腹を搔つ捌く。

先程の背中より楽々と斬れた。

「思った通り、ここはすごく柔らかい」

ネイバーの傷からトリトンが漏れだしていた。多分生き物の血と同じなんだろう。

「もう一発」

今度はそのまま尻尾の方から外に出よう下にいたら踏み潰されそうだし。

「うおおおお！」

そしてそのまま尻尾まで傷口を作ると今度はまた上に飛び乗る。

斬られたせいでこいつは結構上が不安定になるほど動き回っているがそれでも

(これで決める！)

そしてしがみついたまま顔の部分まで移動して行き、僕の右手からスコピオンを伸ばしてそのまま目ん玉に突きつけて押し込む。

「うわあ」

激しい動きで僕はネイバーから振り落とされ、地面にしりもつをつく。

もしいきていたらむちやくちや無防備なので僕は、すぐさまネイバーの方を振り向くともう既にネイバーは倒れていた。

「という事は？」

『訓練終了』

タイムは39秒。

あちやくあの子に負けたか、しかも雄二に比べたらめちやくちや遅い。

「うゝん」

雄二に負けたのは何か嫌だけど、ああまあ今んとこ2位だしそれでいいか

「よ、お疲れさん結構かかったな」

「うるさい」

「でもま、新人なら一分切れれば十分な方だぜ。見てみるあそこ」

「うん？あの人達は」

「あれはB級の奴らだな、多分新人スカウトに動いてんだろう」

「スカウト、なんで？」

「ボーダーではCからBまでは個人でさつき言われたように4000集めればならるんだが、更に先のA級隊員になるにはチーム戦で戦わなきゃいけないんだよ。だからチームに空きが空いてるとこは正隊員になれそうなC級に声掛けてんだよ」

「チーム？ふゝんそうなんだね」

「あ、なに他人事みたいに言ってるんだ。お前も注目されてんだよ」

「え!? 僕も」

「ああ、多分今期の新人の注目株はお前かさっきの女だろうな。お前もまだ素人感抜けてねえがそれでも成長の見込みは十分だからな」

「おお、何か雄二にそんなこと言われると思わなかったよ」

「お前、どうすんだよ。チーム誘われたら」

「え!? 急に言われたらビックリするな自分じゃよくわからんし」

「だろうな」

「それに、よく知らない人と組むのはちよつとやりにくそうだからなく」

「ほう、なら顔見知りならどうだ」

「そうだね、ある程度知ってたらやりやすそうだ」

「ならちよつとよかった」

「へ?」

「お前、俺と組まねえか?」

「ふあ?」

「俺と組んでA級目指さねえか?」

「雄二チーム組んでなかったの?」

「おお」

「……誘われなかったの？」

雄二、愛想悪いし

「ぶっ飛ばすぞ、色々誘われたが面白そうなチームがなかったから断ったんだ」

「面白い？」

「ああ、やっぱなるなら楽しいやつと組んでやらねえと退屈だろ。お前がいい返事くれるならお前がそうだな、勉強を考えても夏までにBになれるよう協力してやるよ」

「本当!？」

「ああ、チームランク戦は今年のは無理だろうから来年までに待つて高一から本格スタートを目指したいと思ってる」

「OKやるよ、僕も雄二なら楽しそうだし。その代わり」

「に、交渉成立だな」

第六話

（side C級ランク戦ブース）

本日最後は、ここ隊員が個人で一騎打ちをするC級ランク戦ブースだ。

ランク戦とはポイントを稼げるもう1つの方法、訓練生同士で一騎打ちして買った方は負けた方からポイントを貰うのができる。

雄二が言うにはここが一番ポイントを稼ぎやすいらしい。

さっきの訓練は僕は20ポイントをもらうことができた。雄二が言うには訓練ではそれが満点で貰えるポイントらしい。

満点をもらうことができたのは素直でうれしいけど20を毎回もらえたとしても、正隊員になるにはかなりかかる。ええと一回が20で後3980必要なのは週2回えとどれくらい、まあとにかく道は長いのだ。

でもできることなら早くてもっと稼ぎたい、このランク戦でどれくらい稼げるかこれが僕のこれからに大きくかわることだ。

もう少し詳しく雄二に聞きたいのだがこれから家の用事で忙しいらしく帰ってしまった。

なので現在は一人である。

「さて、さつそくこのランク戦ブースの使い方を説明しようと思う。ここでは隊員同士の一騎打ちができる。今回は皆初めてという事なのでブースの使い方を教えるぞ！実際ブースを使いながら説明するから皆ペアを組んでくれ」

なるほど中でも何か操作しないといけないのかな、うくん覚えれるかな

ま、とにかく今はペア決めだ。誰でもいいから適当に

「おーい」

「ごめん、もうこの人とするから」

あ、そうなんだ。

なら違う人と、

「あの」

「あ、そのごめんなさい」

「すまん俺友達とするから」

「俺、もその」

おかしい、誰も僕と組んでくれない。

あれ、僕なんかこの人たちにわるいことしたっけ？あの僕初対面のはずなんだけどなんで皆からはぶかれるの、何かこの人たちに悪いことしたっけ？何か陰口叩かれた気が

してきた。泣いちゃうよ僕。

「あの、私と組んでくれませんか」

「え、うそありがとう」

本当にありがとう、危ないところだったもう折れかけていたから僕の心が

「つて、君は訓練で20秒だった」

「あ、見ててくれたんですね」

「だってすごく綺麗でかつこよかったからよく覚えてるよ」

「え、そうですか？ 貴方も大胆な戦い方すごくかつこよかったですよ」

おお、僕初めて女子にかっこいいなんて言われた。

この人確かくねくね曲がる弾を使っていたはずだ。

あの弾はハウンドかな、いやもう一つ何か曲がる弾があるっていったな、雄二がにしてもこの人ハル並みに美人だね、なに下種なこと考えてるんだと思うけど、ハルと同じように髪は短めにして顔の輪郭がはつきり見えるようになってるのが逆に魅力的になっているのは、顔が美形だからなのだろう。目は柔らかくおっとりとした感じなのが、自分よりも年上なのかと思える女性。

ハルは幼さを感じるが、この人は大人な魅力を感じる。

「えっと、大丈夫ですか？」

「え？」

「あの、泣いてますよ？私のハンカチでよければ使いますか」

そういつて僕にハンカチ差し出してくれた。

ありがとう、今は優しきで胸がいつぱいだよ。

「ううん、大丈夫人の温かみにあてられただけだから」

「そう、です、え？」

「大丈夫だよ、ごめん皆僕と組んでくれないから初日から嫌われたのかと」

「貴方もですか？私も皆さんにさけられてるのかと」

嘘、こんな美人うちの学校なら声をかけるのもおこがましいぐらい高嶺の花認定されハルと秀吉と並び三大美女と称され、ミスコン（男限定の非公式）で1，2争いをして
いるだろう。

我らがモテない男子達の強い味方ムツソリ紹介なら写真一枚五百円の最高額を叩き
出せるだろう。

うん？何か至る所から殺気を感じたような、背中がゾクゾクしてきた。

「そうなんだ、僕なんかでよければ喜んで」

「ありがとうございませす、あ、まだ自己紹介してませんでしたね。私は那須玲と言いま
す」

「ご丁寧に頭まで下げられた。

こちらでも自己紹介し返さなければ

「僕は吉井明久つて言います。えつとよろしくお願ひしますね」

そして僕たちは、嵐山隊の時枝充さんにブース内に連れていかれる。

中に入るとブース内はベッドとパソコンとその近くに椅子が置いてあるだけのシンブルな部屋だった。中では違う部屋とつうわでできるようになっており、僕と那須さんは時枝さんにはパソコンの操作方法を教えてもらい、早速ランク戦開始だ。パネル操作している、急に意識が飛んだ感覚を感じた。

そして次の瞬間いたのは先程までの部屋ではなく、どこかよくわからない街中だった。そして目の前には同じように驚いている那須さんの姿もあった。

「那須さん」

「吉井君、よろしくね」

「はいー!」

『ランク戦開始』

開始の合図とともに僕はスコープオンを那須さんは自分の周りにいくつもの光のキューブを展開させていた。さつきもあのキューブを飛ばしていたね。

「!?!」

凄いな、思った以上に速い。

この間合いはまずい、僕は建物を陰にして身を潜めるが那須さんの追撃は止まることなく僕を襲う。

まるで既に分かっているかのように、那須さんの弾丸は遮蔽物だけをよけて僕の体を抉る。

「追いかけてくるの!?!」

追いかける弾丸、それならハウンドっていうやつなんだろう。

でも、訓練の時色んな人がハウンド使ってたけどこんな曲がり方はしてなかった。

あのとき見たハウンドよりこの弾丸は機械的な曲がり方をしていている様に思える。

取り合えずこのまま離れよう、撃ち抜かれたところから何か漏れているけど気にしないでおう。

こういう場合どうしようか、ゲームなら目くらましや出待ちをしてするのだが相手は意思を持った人間だし出待ちは意味ない

なら

僕はスコピオンの切れ味を確かめるために近くの塀をを斬り付けてみた。

おお、これ切れ味凄いな食べ物のように斬れた。

「なら、ここう行こうかなー!」

抜け住宅に入り、僕は那須さんへ今度は塀をまたいで先手を打つ。

このスコープピオンが石も楽々斬れるので、僕はスコープピオンで塀に切れ込みを入れてから塀に飛び込む。

ある程度切れ込みが入った塀は僕の体当たりで簡単に碎けて破片が那須さんの射線の邪魔をしてくれる。

「!?」

だがそれでも完全に防げるなんてことはなかった。

那須さんの弾はしつかり僕の左手を貫き落として更には複数細かい傷を与えてきた。

だが、それでも何とか僕は間合いを詰めることができた。この隙に僕はまだ無事な方である右手にトリオンを集中させてスコープピオンを生成する。

「スコープピオン!」

「!?」

僕は、那須さんの右肩を削り、そのまま首を狙うが流石にそこまでは許してくれず首への攻撃は中途半端になるが、この間合いを取るため傷を複数と左手を失った。多分今回のこのチャンス逃すともう負ける。僕は更に距離を詰めスコープピオンを振るう。

だが、那須さんの華麗な体捌きで僕の攻撃はよけ続けられる。

僕も喧嘩とかでナイフを持っている奴の攻撃は拳だけの奴より攻撃は単純でよけ易

い。

その理由はナイフだけで攻撃しようとするからだ。僕みたいなバカでもわかっている攻撃は簡単に躲せる。

「吉井君、攻撃が単調になってるわ」

「そうですね、ならこれならどうですか」

ここまで躲されるなら僕は敢えてスコープピオンを無くす。そしてそれと同時に僕は那須さんの足をかけて転ばそうとする。でも流石に転ばすことはできなかったが体勢を崩すことは何とか出来た。

「!? バイパー」

僕がスコープピオンを再び構えたのを見ると、那須さんは咄嗟に自分のトリガーを発動させようとバイパーを叫ぶ。

あぶな、僕はつい言葉に反射して攻撃を止めてしまいがそのおかげ幸をなしたのか那須さんの弾が当たらずに済んだ。多分あと一歩前に進んでたら撃ち抜かれていた。

だが、那須さんは僕の一瞬の硬直のうちにすぐ距離を離そうとする。

このまま距離を稼がれたら僕は格好の的になってしまう。

それじゃあ僕の負けが決まってしまう。

なので僕はそう簡単に彼女の思いどおりにはさせないようにする。

この距離でスコープオンを当てるなんて無理だ、絶対届かないし、なので僕は自分の近くにある電柱を斬り倒した。

電柱もやはり簡単にきれそのまま倒れて崩れ、そのまま強くコンクリートに叩きつけられた。その時の衝突音と土煙が市街地内に響く。僕はそのうちにコンクリートの道を挟む両側の塀から那須さんとの距離を詰め、更に背後に回る。さすがに目の前である事が起きたんだ、那須さんの意識は電柱に逸れていて回り込むのは簡単だった。

「もらったアー！」

「いえ、そう簡単にさせないわ」

那須さんは僕が背後に回っているのがわかるとチラリと後ろを振り返るだけでバイパーを放ってきた。

まずい！僕はわざと自分の体を転けて躲すが、このままじゃ蜂の巣になってしまう。僕は残ってる右手に力を込めて無理やり転んだ状態で体を動かし、那須さんの直線上からどき、勢いそのまま活かして立ち上がる。

その間に那須さんもこちら側に向き直して僕を見詰め、目前にいる僕へ標準を定める。

そして僕と那須さんは二人合わせて静止した。この距離今那須さんは攻撃は勿論僕に届くし、僕も那須さんの攻撃を一度躲せば那須さんの首を斬ることができる。だから

僕達は下手に動かない、僕はじつと那須さん睨みの挙動一つ一つに意識を向ける。宙にフワフワ浮いているキューブ上のトリオンは決まった規則で那須さんの周りを飛び続けていく。少しでも、この軌道が乱れた時が勝負の時だ。

「すう、ふうう」

僕は自然と大きく息を吸い吐く。

更に緊張からか、後ろに下がっている左足に力が入り込む。

緊張と共に自分の集中力が高まっている事がわかる。

それは多分那須さんみだろう、両足を肩より少し広くして腰を落とす。多分那須さんはこれ以上下がることはないだろう。

「ここが勝負時だ。」

僕は更に腰を落としていく、いつでも地面を蹴りこんで彼女の懐に飛びこめるような気を抜かない。

僕達の目は常に相手の隙を捕えようと獲物を狙う肉食獣のように、どちらも常に牙をひっそりと窺わせ常にプレッシャーを放ち、この空気感で僕ので精神はジワジワ削られながら息を飲みこむ。

「」

「

那須さんのトリオンが乱れた。

僕は強く地面を蹴りこみ走りこむ。

那須さんの直線的な攻撃を僕は大きく右に逸れ躲す。

躲した、だが那須さんの攻撃の本領はここから、細かいキューブ全てが那須さんの攻撃の手数なんだ。

息をつく暇がない怒涛の攻撃、連続的な攻撃は僕の行く手を阻み僕を徐々に追い込まれ彼女の攻撃は僕の一步先を行っていた、だが僕もやられるだけじゃない僕はスコープオンを彼女に向かい投げ飛ばし攻撃する。

この攻撃は彼女の意識外の攻撃だったのか思った以上に大きくのけぞってくれたので大きな隙が生まれた。僕はこの隙を逃さない手はない、スコープオンを持つ手に力がこもる、彼女を守る術はもうないこの一撃で勝負を決める。

「!？」

「いい勝負だったわありがとう、でも勝ち譲れないわ」

躲したと思っていた、僕が躲した最初あれは牽制だと思っていたんだけど。

ただどあの攻撃はそれで終わりじゃなかったんだ。

一度躲された攻撃は180度向きが変わり後ろから僕を貫かれる。

「吉井君、これで終わりよ」

那須さんは手を上に掲げ更なる追撃が僕を襲った。

もう目が霞み、トリオンが半分削られたせいで視界の殆どは白く染まっていく。

もう落ちるんだろう、右手は失い腹にも幾つもの穴が開いている。足も殆ど機能しておらず力も入らないこれで負けが決まるんだろう。

僕は支えを失い地面に倒れこんだ。

初勝負で那須さんが相手だ多分彼女は今期の最強と言つてもいい位の相手だ。

自分によくやったそう言つてもいいだろう。

僕は密かに目を瞑りベイルアウトを待つ。

アキ君

何か一瞬ハルの声が頭をよぎる。

そうだ、僕はやめようと誓つたじゃないか。

自分を決めつける事を、僕が自分がここまでつて決めつけたら僕は僕がこの程度と認められたことになる。

それじゃだめだ。自分をもっと大きくして自分がハルに選ばれても不思議じゃない位の人間になるつて決めただから、その途中であきらめて自分を納得しちや駄目じゃないか。

自分を追い込め、まだやれると言いつけさせろ。

歯を食いしばり、まだ薄っすらと目に写る那須さんを睨み僕は自分に残っているトリオン全てをスコープピオンに注ぎこむ。

「まだだ」

僕は失った左手の代わりのため、肩を大きく振り上げもう一度那須さんの懐に飛び込む。

立つことのできない足で何とか地面を蹴り飛ばして、僕は最後の攻撃を彼女へ届かせようとする。

何とか飛び込んで那須さんの首元まで、僕は必至に最後まで足掻き勝つこと諦めなかった。

どちらが勝ったのかそれを僕が知る前にこの仮想空間に勝負の終わりを告げる機械音が鳴り響く。

『戦闘体活動限界ベイルアウト』

第七話

目が覚めるとそこは、よく知らない天井だった。

「ああ、まけたんだっけ」

「どんまいです、でもとてもいい勝負でしたよ」

「時枝さん」

明久のお隣には時枝充が立っていた。

「初めてにしては、スコープオンを上手く使えてましたよ。撃たれる覚悟で突っ込むのもいくら死なないトリオン体とはいえ初めは勇気がいります。最初の内にここまでできれば正隊員までそう長くはありません」

時枝充は思った。

この人は多分喧嘩慣れしている人だ。

トリオン兵との訓練と今回のランク戦で見た事は懐に迷わず飛び込む勇氣、自分に攻撃されている時の直感力、それに躲し方も慣れてる感じがした。

柿崎先輩の話だと確か坂本先輩の友達と聞いている。確か坂本先輩はボーダー内でもたまたま揉め事を起こしていると目撃情報が飛び交う。

「だけど坂本先輩は目をつけられるタイプだけど、この人の場合は見た感じは人が良さ
そうな感じがする。多分巻き込まれタイプか首を突っ込むタイプなんだろう。」

「そう言ってくれると自信を持てるよありがとう時枝さん」

「時枝でいいですよ僕の方が年下ですし」

「そっかそうなんだね…。あれ僕何歳か教えったけ？」

「坂本先輩と同じ歳と聞きました」

柿崎先輩から

「雄二の事知ってるの？」

「はい、ボーダー内では結構有名な人なので」

「そうなの、悪名で？」

「いえそういう感じも否定しきれませんが、あの人は初訓練で既に有望な新人として
色々な隊の方が目をつけていましたので」

「うっそ?!それ本当だったの雄二がでまかせ言ったんじゃないやなくて」

「はい」

吉井先輩の行動でどれだけ坂本先輩に信頼がないかわかる。

後この人はすぐくわかりやすい。

「因みに、今の僕と初訓練の雄二どっちの方が強い？」

「申し上げにくいですが、圧倒的に坂本先輩ですね」

本人を前に言ってはかわいそうだが否定しきれない。

トリオンという点でいえば坂本先輩はボーダーでも一二を争うトリオンの持ち主である。

トリガーにとって最も重要なのはトリオンの量だから、ここに差が着けばつくほどそのまま強さに現れる。

「でも、吉井先輩個人で考えるなら先輩も注目されると思います」

この人は、多分伸びるタイプの人だ。トリオンは少ないと診断されてたけど勘がよくて足が早く機動力もあるタイプ、典型的な前衛型だと思う。

「じゃあさ、時枝君那須さんは？」

「あの人は戦闘能力も高いですが希少性という点でもいいと思います。バイパーを最初からあんなに使いこなせる人はいないですから。」

「那須さんが使ってた武器ってそんなに凄いの？」

「はい……試験合格した後に配られた資料であらかたトリガーの説明をみませんでしたか？」

「え!? えつとく大変言いにくいんだけど……よくわからなかった……っていうか」

成程、だからバイパー相手にあんな戦い方をしていたのか。バイパーを使いこなせる

人相手に遮蔽物とかはあまり意味をなさない上に、バイパーというのは常に自分で軌道を決めて撃つもの、確かに那須先輩はバイパーを使いこなせている、あそこまでバイパーを使える人は今のボーダーでも数人しかいないだろう。だが付け入る隙はある、彼女はまだ経験が少ない為に所々自分の予想外の出来事に集中力が乱れその際射線が少し乱れてた。バイパーというトリガーはそれぐらい繊細なトリガーなんだ。

今回の勝負、本当に僅差だった。もし吉井先輩がバイパーの事を頭に入っていたら結果はひっくり返っていたかも知れずと思う。今回のがもしB級ランク戦だったらと、彼女の今回見た穴は経験でいくらでも埋まる。

それと同時にふとこう思う。今回のがもしB級ランク戦だったらと、彼女の今回見た穴は経験でいくらでも埋まる。更に遠くを狙える射撃トリガーはオペレーターへの支援を合わせたら更に遠距離からの攻撃をすることだって可能になる。

なら、吉井先輩は今後差をつけられるのかと聞かれればそれも無いと思う。

この人の直観力とそれを活かしている反射神経、幾らトリオン体が生身の何倍の運動能力を宿していると言っても、最初の方ではその機能に振り回されて中々動きにぎこちなかったりする。

だが、この人にはその違和感があまり感じられなかった。多分それは一つ前の大型トリオン兵訓練と今回の那須先輩の戦闘で完全に掌握したんだろう自分のトリオン体を、

この人は体で覚えるのが他の人よりも早いんだ、慣れるのが早いこういった方が正しいかもしれない。だから後半よく知らなかったバイパーを那須先輩と合わせて対処し始めていた。

この人にもし早めにB級の戦い方を知ってもらったら、そう考えると少し面白く思えてくる。

それになによりあの坂本先輩が目をつけているんだ、多分今期最速で上がってくるのはこの人だろう。

「吉井先輩、後でよろしければトリガーの説明致しましょうか？わからないところがあれば教えますよ」

「いいの!?!ありがとう時枝君」

「別に大丈夫ですよ、ただ他の人達のランク戦が終わってからになりますよ」

「全然いいよ!ほんと助かる」

「では、この話は後でという事で」

次の人も待つてる。最近入隊希望の人達が増えてきてこの仕事も結構忙しくなってきた。

〈side 明久〉

今日の訓練は終わり、僕は20稼いだけど結果那須さんに負けたことにより1005
になってしまい今日稼いだのは5ポイントだけだった。

道のりは長い。

でもあまり、その事に関してあまり焦らず落ち着いている。那須さんに負けたのは
悔しいけど、それ以上に楽しい思えた。必死に相手を攻略するのもそしてこの高い壁を
見て乗り越えようとするのを僕は楽しんでいた。

だから焦つてないのかも、長くても不安を感じずにやれているのは自分が楽しんでい
るからだ。

そして、手伝つてくれる人もいるし。

今日訓練が終われば、時枝君がトリガーについて詳しく教えてくれるって言うてくれ
た。

優しいな時枝君は、僕なんかのために時間を割いてくれるなんて

「吉井君」

「あ、那須さん今日はありがとうございました」

「そんな、こつちも色々勉強になったし私の方こそ組んでくれてありがとう」

僕がお辞儀をすると那須さんも返してくれる。

那須さんはお辞儀の隅々まで綺麗だね。

何かいい所のお嬢様みたいだ。

「それで吉井君今少しいいかしら？」

「今？うくんそうだねもうちよつとしたら時枝君が来るんだけどそれまでならいいですけど」

「時枝君つて、今日私達訓練生の引率をしてくれた嵐山隊の？」

「うん、トリガーについて僕まだ理解しきれてないから教えてくれるつて」

「へえ〜いいな」

「それなら那須さんもどう？」

「え？いいのかな私がいても」

「時枝君ならいいつて言ってくれると思うよ」

「お待たせしました吉井先輩」

あ、時枝君来てくれた…。つとあれ嵐山さん達もいるね？

確か嵐山さんとあと一人あの人柿崎さんつて言っただけ

「君が吉井君だね、俺は嵐山准よろしく！」

眩しい！イケメンオーラが眩しすぎるこの人。

「よろしくお願ひします」

「柿崎だよろしくな」

僕は嵐山さんと柿崎さん2人と握手を交わして僕も名前を名乗る。

「はい、吉井明久です。あ、こっちは那須さんです」

「那須玲と申します」

「よろしく！確か今日吉井君とランク戦していたバイパー使いだったね、凄かったよバイパーをあそこまで使えるのは正隊員でもなかなかいない」

「ありがとうございます」

「自己紹介も済みましたし吉井先輩。お話の件ですがどうですかうちの作戦室でも構いませんか？」

「もちろん僕はどこでも、あ、でもその前にお願ひがあるんだけど那須さんも色々聞いてみたいって言うから一緒にダメかな？」

「構わないさ、研鑽を積もうとしている訓練生を止める道理はないさ、一緒に来るといい」

「ありがとうございます」

何か嵐山隊つていい人ばかりだな。

雄二に爪の垢でものましてやりたいよ、それでもあの悪辣な性格は治ないだろうけど。

そして僕と那須さんは、嵐山さんに案内してもらい嵐山隊の作戦室に向かう。

改めてこの基地歩くとだだっ広いな、エレベーターの階は沢山あるし廊下も長い。廊下は基本白一色でどこもかしこも似た感じなのばかりで、右を見ても左を見ても特に違いとかもなく、多分案内ないと迷うね断言する。

「さて、ここが俺達の作戦室だ」

この階は特に同じようなのが多い気がする。

あるのはアパートみたいにくつも扉が設置されていた。

「遠慮なく入ってくれ！」

「はい、えっと失礼します」

「お邪魔します」

中は、シンプルにロッカーと机それから本棚と… あ、テレビもあるんだ。これってもしかして備え付けなのかな？

チームの作戦室って結構豪華なんだね、部屋自体も結構広いし。

つとそして、おおまさかスーツ姿の美少女がいるなんてムツツリーニがいたらフラツシユの雨をかぶ… ん？

「初めまして木下優子って言います。どうか… よろしく」

「秀吉？… いや秀吉のお姉さん！」

（げ、こいつ確か秀吉の）

「確か、吉井明久君だったわよね。秀吉がいつもお世話になってるわ」

秀吉のお姉さんは満面の笑みを見せていた。

でも、なんだろう一瞬引きつったような顔をしていた。

「なんだ、優子は吉井君と知り合いなのか？」

「はい、弟の友達ですて」

へえ、秀吉のお姉さんボーダーにいたんだ知らなかったな。

秀吉ってなんでかあんまり家の事話そうとしないから、この人との面識は一度秀吉の家に行った時あった。

「そうなんですネ、木下先輩あまり家の事話さないから」

「そーいや、話したがらないな」

「え!? そ、そうですか? おほほほほほあ、この前買ったお菓子が残っているのでお出ししますね」

と言って秀吉のお姉さんは消えるようにこの場から去っていった。

「さて、それじゃ始めようか。明久君それから那須さんは何を知りたい？」

「僕は、武器全般をもっとわかりやすく特に銃系の」

「私も同じようにお願ひします。今日の、スコープオンにあんな使い方ができるなんてわかりませんでした」

僕と那須さんはお互い自分の武器よりも対戦したために生まれた質問を嵐山さんに聞いた。

「わかった、ならまずは銃手のトリガーについて説明しよう。優子」

「はい、モニターつけます」

先程まで暗かった画面、そこには4つの名前と絵が表示されていた。

「まずはアステロイド、こいつはほかの二種と違って尖った特性はないが、弾自体に威力があり貫通力がある。シンプルな作りなため銃手や射手では一番使われている」

嵐山さんはモニターで実際に使われているアステロイドの動画を見せながら説明してくれる。

動画を見せてくれるのはわかりやすくありがたいな。

「次にバイパー、那須さんが使っているトリガーだ。このトリガーは威力は他2種に劣るが、自分の思い通りに弾の軌道を変化させることができる。C級では使われないがB級からはシールドを使えるようになるから、シールドを避けて相手に当てる人が多いな」

なるほど、Bになったらそんなの使えるんだ。

でも確かにそういうバリア系なかったら、みんな銃系一択になるし、攻撃を守るすべは普通作るよね。

バイパー自体は一発にそこまで威力はないんだ。多分今回那須さんがアステロイドを使つてたら突っ込んだ時点で負けてる。

「そしてメテオラ、火力重視の弾丸トリガーだ。こいつは着弾すると広範囲に爆風を起こす威力が高いがその分トリオン調整をしておかないと自分の視界も阻めてしまう、だが敵のシールドの破壊やスナイパーと連携する時射線を通しやすくする、C級では使う人は少ないがB級になるとこいつを入れる人は増える」

「そして最後にこいつがハウンド、C級の銃手は殆どこれを使っているな、こいつの主な特徴は追尾すること、視線かもしくは近くにいるトリオン体を追いかける。どちらにしてもハウンドはどんな体制からでもそして感知誘導ならある程度の距離なら追いかけてくる」

もしかしたらだけど、このハウンドあいてにしたら積じやね

追いかける、防げない躲せないこの三つにどうしろと

「あの嵐山さん」

「なんだい吉井くん」

「確か、雄二はハウンド使ってたんですよね？」

「うん、確か入隊時はそうだったな。今は複数のトリガーで構成をいじっているが」

あいつ、これわかっていたな。

それわかって狩りやすいアタッカーを狩っていたんだろな。

「まあ、坂本君は今ではボーダーを誇る優秀な射手になっているよ」

「射手？ 射手とは銃手とは違うんですか？」

「そうだね、全く違うと認識しておいた方がいい」

「銃手のトリガーは全て最初から使い手によつて設定されています。ですが那須先輩のような射手はその場その場で弾速、射程そして威力を設定できるようになっているんですよ」

「え、つてことはそつちの方が強くない？ だつて自分で好きなようにできるんだつたら相手も読みにくいし」

だつて、最初から設定されているのより自分好みでバンバンできたほうがいいと思う。

「それでもないぞ、射手のトリガーはイメージが大事でしつかりと頭の中に思い描けないと変な弾しか飛ばない。集中力がない奴にはこのトリガーは向いてねえんだ。だが銃手はそんな心配はいらない訓練と比例して銃手のトリガーは上手くなる」

柿崎さんの説明で何となくわかつたと思う。

さて、銃手のトリガーは多分頭に入った。

今度は、僕も使っている剣手のトリガーだ。

「次にアタツカーのトリガーだがまずは弧月。これは威力と耐久力その他全てがバランスよくできた万能型こいつがボーダーでアタツカーの中では最も人気なトリガーだな」

「弧月、それが一番人気なんだ。やつぱり僕も弧月にした方がよかつたのかな」

僕がスコープピオンを選んだきつかけは何となく、ただの直感で選んだんだけど皆それ使うつてことはやつぱりそれが強いからなんだろうし。

「いや、一概にそうはいえない。君が使つていたスコープピオン単純な威力だけというのなら古月よりも上だ。スコープピオンはトリオンを威力と武器としてトリオンを固めるこの二つしかない。そのため耐久力はないが非常に軽い。スコープピオンの一番の特徴はその軽さと体のどんなところからでも作り出すことができる。吉井君もしていただろ？ 斬れて失った腕の代わりに生やしていただろ、あのようにどんな場面でも攻撃に転じられるのがスコープピオン」

ここら辺のアタツカートリガーの説明は僕よりも那須さんの方が聞き入っていた。

僕はというとこのスコープピオンにそんな性能があるとは、ならこのスコープピオンは足からとかでも生やすことができるのか？

何それすごく面白そう

「なあ、今度B級以上の個人ランク戦を見に行かねえか？」

「B級のですか？」

柿崎さんの提案に僕はどうかたえようか少し迷う。

「ああ、自分より格上の奴らから戦い方を学んでみるのもいいと思うぜ」

正隊員のランク戦か、少しどんなものか見てみたいな。

僕はC級ランク戦ブースにしかいったことがないけど、あそこも結構なスペースでよくワールドカップの同時中継何かの時一気の全部の試合全てを映しているあのスペースみたいで見やすく近くにジューズの自動販売機もあつたりして休憩もできて使い心地がよさそう。

ただこれ以上お世話になるのもなあ

「因みに、スコープピオン使っているのって何人ぐらいいるんですか?」

「何人って聞かれると困るな、結構いるからな」

「アタッカーは全員弧月かスコープピオンです。人気なのは弧月ですがあくまでベターな選択とっててください、極端に偏っているわけではないので」

「あの、嵐山さん」

「何だい」

僕が柿崎さん達と話している間、那須さんが嵐山さんと話している。

何を話しているのかはよく聞き取れなかった。

聞き耳を立てる気はあんまりなかったので、そういう失礼なことはしないよ僕は

嵐山さんの所に行ってもう午後七時を回ったもういい時間だ。

僕も那須さんも話が区切りになりお暇することにした。

「今日ありがとうございます。」

「とても有意義な時間を過ごせました」

「いや、気にしなくていい。俺達もしたくてしたことだからな。」

「いえ、そこまでお世話になるわけ」

「それを気にしなくていいと言っているんだ。君達は入隊試験を突破してボーダーに入隊したその時点で俺達は高めあうライバルであり、背中を守りあう仲間でもあるんだからな、何かあったら普通の先輩に頼るみたいにもたまた来てくれそれじゃあ！」

そして僕達は嵐山隊の作戦室を出る。

にしてもボーダー内って同じような廊下や部屋でわかりにくいな。

「那須さんって学校は？」

「私？私は星輪に通っているわ」

「星輪ってたしか女子高の」

確かあそこってお嬢様学校だったと思うんだけど、ムツソリーニがあそこの制服可愛いって言ってたな。

「そう、その中等三年」

「え、同い年!？」

「吉井君も今年受験なの?」

「そうだ、とうか那須さんってずっと高校生かと思っていた」

「だから私に敬語だったのね」

「うん、なんか大人の女性って感じがしてさ」

「そう、ありがと」

「那須さん進路は?」

「私はそのまま高等部に、特に行きたい学校はないしね」

「そうなん「ピロリン」ん?」

僕達が中三トークに花咲かせているとケータイがポケットで鳴る。

この音はメールが来た音だね。

この時間僕にメール送るのは思春期がお世話になるサイトからのメールか、もしくはアキ君へ

訓練もう終わった?終わってならお疲れ様!

どんな訓練だったか話聞かせてね、後この下に今日の分の問題のファイル添付してるから

明日までにやっておくように、明日チェック

するからわからないことがあったら質問して
その時してね。

PS. やらなかったら、わかっているよね？

僕は下の方に添付されているファイルを開き絶句したのは言うまでもないと思う。
さて帰っても眠るのは日が変わってからかな。

「どうしたの？」

「ちよつと家庭教師からね」

「へえ、吉井君家庭教師雇っているんだ」

「あ、いや家庭教師みたいなことしてくれる幼馴染みがいるから。その人から今日の分の課題が来たんだ」

「ふふ、いい友達がいるんだね」

「うん、まあね」

お、そろそろ出口だ。

トリガー解除しないと

C級のボーダーの外でのトリガーの使用は固く禁ずる。

なぜかよくわからないけど、変な事で罰則食らうのは嫌だし

「さて、トリガーオフ」

「トリガーオフ」

那須さんもトリガーを解除して生身になる。

少し残念なのは那須さんの制服見たかったなあ。

ま、それは置いておいて

「あれ那須さん」

「な、何」

気のせいかな、生身の那須さんをよく見える距離まで寄り少し那須さんの顔を見ている。

「いや、顔色が少し…大丈夫？」

那須さんの肌が元から白いから気のせいかもしれないけど何となく、白すぎると思っただ。

ただ今は顔が少し赤くなってきている。

「あ、うん。元々体強くないから、今日の疲れが出たんだと思う」

「そうなんだ、えっ、なら家に帰るのは大丈夫なの？」

「それは心配いらないよ、親が車で迎えに「ぴこん！」ごめん母から着信きたから出るね」
「うん」

那須さんは少し距離を話して親と電話する。

にしても元々体が弱いとは思わなかったな、というかそんな人がボーダーに入って大丈夫なの？体への負担が大きくなったりして病気とかって親は心配してないのかな？
「え!? うんわかった」

那須さんが電話で何か驚く事実でもあったのか少し大きな声で驚き電話を切る。
何かよくない事でもあったのかな？少し俯いてる。

「どうかしたの?」

「うん、それがね来てる途中の道で車とバイクの接触事故があつたらしくってこつち来るのは結構遅くなるって言われたの」

「大丈夫なの!」

那須さんもそうだけど、何かえらい事故が起きてるな被害者とかもそうだけど死人とが出てそうなんだけど

僕も結構驚いたのでその声が出口付近で響く。

「で、那須さんはどうするの」

「私は待つわ。あと何分かかるかわからないけど来てくれるって言ってるからここで待つとく」

うん、待つとくか。

事故ってあんまり見ないからよく分からないけどそんなすぐに解決するのか？

「那須さん、今那須さんの親ってどこなの？」

「え、えつと確か」

僕が那須さんの場所を尋ねると、那須さんはスマホの地図機能でだいたいの位置を教えてくださいました。

「ここら辺って少しボーダーから離れてるけど直線で行けるからそこまで時間がかからないな。」

「ねえ那須さん」

「はい」

「親御さんにこのコンビニに行けるか聞いてみて」

僕は那須さんの地図アプリに乗っているコンビニにピンを指し指定する。

このコンビニは、那須さんの親がいる所からそこまで離れてないむしろ振り返ると見えるぐらい近いところにある。

「え？どうして」

「ここを待ち合わせにしたらどうか、親御さんこつち来るの厳しいんですよ」

正直、こつちに来てもらうのが一番いいと思っただけでここで待つのはいいとは思えない。

体弱い人って人が多い所とか賑やかなところにいる方が疲れるらしいし、ボーダーは

まだ人が多くて隊員達で賑わっている。

そんな所にいるより、親と合流させてまあ親が近くにいる車の中とかの方が休めそうだよな。

「僕もそつちの道が帰り道なんだ、一緒に帰るなんてどうかな？」

「そうね、少し聞いてみる」

「もしもし、うんあのね、そうそのコンビニで、大丈夫友達も送ってくれるって言ってるから、うん、うんじゃそれでまた後で」

「行」吉井君

僕の提案を受け入れてくれた那須さんと僕は、指定したコンビニに向けて歩き出す。

外は少し暑く、そろそろ6月に入ろうとしているのでジメツとした暑さだ。歩いてると那須さんはこの暑さがキツイのか少し歩くペースが遅くなってる。僕もそれに合わせてゆっくりめのペースにしながら2人で夜道を歩き話していた。

「那須さんって何でボーダーに入ったの？」

「ボーダーに少し面白そうなテーマで研究してるのがあってねそれで入隊したの」

「研究？ 一体なんの研究してるの」

「体の弱い人はトリオン体ではどうなのかって言う研究、私は昔から体が弱くて外で遊んだりしてこなかったから、憧れみたいのがあったの」

トリオン、僕はあんまりよくわかってないけど確か武器とかあのボーダーの施設の殆どはトリオン使ってるんだよね。結構便利だねトリオンって。

そしてそれを今度は健康に……か立派な事考える人もいたもんだ、

「元気に遊ぶ、みたいなの？」

普通な事、僕にとっては当たり前のことを那須さんは夢見ていたという。

彼女が自分の夢の姿を話している時は、頬から笑みが漏れ目をうるわせながら話してくれた。まるで夢物語を語る少女のように楽しそうに

「そんな感じね。走ったりスポーツしたり、とにかく私も外で元気に体を動かしたかったの」

「なるほど、じゃあ今日はどうだったの？僕とのランク戦」

「そうね、すごく楽しかった！あんなに必死になったのは生まれて初めて」

彼女は満面の笑みでそう答えた。

僕が初めて受けた彼女の印象とはかけ離れた可愛らしい笑みで

「そっか、それはよかった。じゃあ今日はその疲れが出たのかな」

「そうかもしれない」

多分、また疲れがでて疲労が溜まるかもしれない。

「ねえ、那須さんまた戦おうね。次は負けないから！」

「ふふ、次も勝たせてもらおうわ。私が先に正隊員になる」

ぐうぐ

「あ」

お互い、訓練が終わり同時にお腹がなって恥ずかしさのあまり間の抜けた声が出てしまった。

「えつと、そうだ!」

僕は自分のカバンの中を漁る。

確かこん中に食べ物が入ってたはず

あ、別に1週間前が入ってるとかそんな危険物ではない予め言っておく。

「これ、一緒に食べない」

「え、これっておにぎり?」

「うん、今日の昼ごはんのつもりで作ったんだけど食べ損ねてねよかつたらどうぞ」

「え、いやその「ぐう」…。もらいます」

またお腹がなつてしまった那須さんは自分のお腹を手で押えて静かに貰うことを了承した。

那須さんはおにぎりに包まれたラップを外すと小さく口を開けて小鳥がついばむようにおにぎりを食べた。

「!?」

最初は少し少しかったけど、食べてると徐々に頬が緩んでいき幸せそうに僕のおにぎりを食べてくれた。

「どう、おいしい?」

「ええ、とても…あれ、吉井君これが昼食だつて」

「そうだよ、時間なくてたべて…『ごめんなさい』?」

「え、なんで?」

「その、お腹すいてたとはいえ人の食べ物を横取りするなんて浅ましいことを…」

「ああ、気にしなくていいよ。僕の方はまだあるし」

そう言つて僕はもう1つのおにぎりをバッグから取り出す。ちなみにおにぎりは全部で3つ作つていた。僕自身おにぎり一個でも後水あれば1週間は生きれるぐらいの自信はあるからそこら辺は気にしなくていい。

それに、おにぎり1個以上のもの貰つたし別にいい。

「やっぱり、料理つて人に食べてもらつてこそだね。美味しかった那須さん」

「ええ、とても」

「こういう感想はすごく嬉しいから、こういうの貰えるならおにぎりなんて安いもんだ。」

「吉井君、さっきの口ぶりだところのおにぎり、君が作ったの」

「うん、僕が作ったんだ」

「料理できるんだ」

「一人暮らしだからね、家事は覚えたよ」

「へえ、そうなんだね。って事は今から帰ってすぐ夕食の準備を」

「さすがに凝ったもの作るのは面倒だから、作り置きしてるだしにうどんを、卵混ぜて卵とじにするのもいいか」

卵、あつたよね。なかつたら素うどん確定だ。

「男の子なのに料理できるんだ」

「そんなにすごいかな？」

「だって男の子ってあんまり料理しないって聞いたから」

そういうものか、雄二も料理は上手いしムツツリーニも調理実習上手くできてたし、秀吉も美味しそうだってね。話は変わるけど秀吉の手料理は個人的にすごく食べてみたい。

「というか、那須さんってそういうのは人づてで聞いているのか」

「なんなら、今度お菓子でも作ってきてあげようか？」

「え、いいの？」

「うん」

お菓子はあんまり作らないけど苦手って程じゃないし、受験勉強の息抜きに簡単なのでよければ今度

そう思っていたら僕の視界の端にすぐ期待の眼差しを向けている那須さんが視界の端に写った。

さて、もの凄いもの作るかな

そろそろコンビニが見えてきた。

二台ほど車が止まっているけど、さてどっちが那須さんの親の車なのか。

「那須さんの家の車来ている？」

「あ、うん来てる！ありがと送ってくれて」

「いや、気にしないで」

「あのさ」

「うん？」

「よかつたら送っていいんか？」

「え？」

「ここまで送ってもらったし、母には私からお願いすればいいって言ってくれると思う」

「ありがと、でもいいよ。僕の住んでるところはここから結構近いから」

「そうなんだ」

「ありがとう那須さん」

「それはこつちのセリフだよじゃあまた」

「うん」

僕は那須さんが車に乗るのまで確認すると僕もコンビニを曲がり自分の帰り道へ向かう。

もう夏手前、夜になっても少し暑さが残っている。

ふう、普通に歩いているだけでも汗をかきそうだよ。

僕は服をビラビラとふり服の内側に外の空気を服の内側に入れて風を入れる。

「あ、この前もうどん使ったような」

何か不安になってきた。

近くのスーパーまで引き返そうかな、うくんでも家近くまで来たしな今日は何かそれ残っていたらそれ使って作ろうかな。

ってあれ

僕は僕の住んでるアパートの階段近くにいる人物に目が留まる。

何かモジモジしているみたいだけど

「ハル」

「ひゃー！」

「どうしたの？こんな遅くに」

「えっと、その」

「あ、課題はちゃんとやるよ。少し鬼畜かなって思ったけど心配しないでしつかりするから」

「あ、うん。じゃなくてそのね、今日お母さんが晩ご飯カレー作ったんだけど作りすぎちゃってさそのアキ君もどうかなくて」

「え!?!いいの」

「う、うん」

「ありがとう」

「ふう、よかった喜んでもらえて」

「速く行こすごく楽しみ」

ハルの家のカレーはとても美味しく僕の好物の一つなのだ。

この時期なら夏野菜カレーかな、うん野菜の甘さがコクとなって美味しんだよね。

さてそうと決まればすぐハルの家に行こう

「ハル早く行こー！」

「あ、まってよアキ君」